

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第325集

下醍醐遺跡発掘調査報告書

一級河川伊手川小規模河川改修工事・原体地区扱い手育成基盤整備事業関連発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

下醍醐遺跡発掘調査報告書

一級河川伊手川小規模河川改修工事・原体地区扱い手育成基盤整備事業関連発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人たちの創造してきた文化遺跡を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺跡が消滅することはまことに惜しいことではありますが、その反面それまで闇に包まれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、眞岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとって参りました。

本報告書は、一級河川伊手川小規模河川改修工事・原体地区扱い手育成基盤整備事業に関連して平成10年度に発掘調査を実施した江刺市の下醍醐遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって縄文時代晚期の堅穴状遺構や土坑をはじめ、周辺に遺構の存在を示す多くの縄文時代中期の土器の出土など貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県水沢地方振興局土木部や江刺市教育委員会を始めとする関係各位に心から感謝申し上げます。

平成 11 年 11 月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船 越 昭 治

例　　言

1. 本報告書は、岩手県江刺市田原字高野前95ほかに所在する下醍醐遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、一級河川伊手川小規模河川改修工事・原体地区扱い手賃成基盤整備事業に伴い、岩手県教育委員会と水沢地方振興局土木部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 本遺跡の成果は、平成10年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査第311集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」に公表したが、本書を正式な報告とする。
4. 岩手県遺跡登録台帳における番号と調査時の遺跡略号は、以下の通りである。

遺跡番号 NE 08-2047

遺跡略号 SDG 98-D

5. 調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。

調査期間 平成10年4月13日～6月30日

調査面積 4,600m²

調査担当者 木戸口俊子・佐々木志麻

6. 室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

室内整理期間 平成10年11月1日～平成11年3月31日

整理担当者 木戸口俊子

7. 本報告書の執筆は、木戸口俊子が担当した。

8. 分析鑑定及び委託業務は次の方々に依頼した。(敬称略)

石質鑑定 花崗岩研究会

基準点測量 レクト技術開発

9. 国土地理院発行の地図を複製したものは図中に図幅名と縮尺を記した。

10. 遺構の埋土観察には、農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を参考にした。

11. 本報告書に掲載した実測図の凡例については、目次の末尾に掲載した。

12. 発掘調査においては江刺市教育委員会をはじめ地元の方々にご協力をいただいた。

13. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序

例 言

<本 文>

I 調査に至る経過	1	IV 調査結果	
II 立地と環境		1. 調査概要	10
1. 遺跡の位置	1	2. 遺構	
2. 地形と地質	1	1) 壺穴状遺構	13
3. 基本層序	3	2) 土坑	14
4. 江刺市の遺跡	4	3) 焼土	17
III 調査方法と整理方法		4) 柱穴状ピット	18
1. 野外調査		5) 壺間状遺構	19
1) グリットの設定	8	3. 遺構外出土遺物	
2) 粗掘と精査	8	1) 北側調査区	20
3) 遺構の記録	8	2) 南側調査区	20
2. 整理方法		3) 土製品	21
1) 遺構図面	9	4) 石器	21
2) 遺物	9	V まとめ	34
3) 写真	9	報告書抄録	48

<図 版>

第1図 岩手県図	2	第12図 柱穴状ピット(pp1~pp8)	18
第2図 地形図	3	第13図 壺間状遺構	19
第3図 北側調査区基本層序	3	第14図 遺構外出土土器(1)	22
第4図 南側調査区基本層序	4	第15図 遺構外出土土器(2)	23
第5図 遺跡位置及び周辺の遺跡図	6	第16図 遺構外出土土器(3)・土製品	24
第6図 遺構周辺図	10	第17図 遺構外出土石器(1)	25
第7図 遺構配置図	11・12	第18図 遺構外出土石器(2)	26
第8図 壺穴状遺構・出土遺物	13	第19図 遺構外出土石器(3)	27
第9図 1号土坑~6号土坑	15	第20図 遺構外出土石器(4)	28
第10図 7号土坑・8号土坑・出土遺物	16	第21図 遺構外出土石器(5)	29
第11図 1号焼土~3号焼土・出土遺物	17	第22図 遺構外出土石器(6)	30

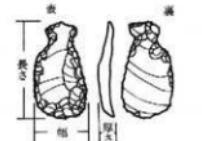
<表>

第1表 周辺の遺跡表.....	7
第2表 柱穴状ピット.....	18
第3表 土器観察表 (1)・(2).....	31・32
第4表 石器観察表 (1)・(2).....	32・33

<写真図版>

写真図版 1 調査区遠景・近景.....	37	写真図版 6 出土土器 (1).....	42
写真図版 2 基本層序・竪穴状遺構、 1号土坑・2号土坑.....	38	写真図版 7 出土土器 (2).....	43
写真図版 3 3号土坑～6号土坑.....	39	写真図版 8 出土土器 (3)・土製品.....	44
写真図版 4 7号土坑・8号土坑、 竪穴状遺構.....	40	写真図版 9 出土石器 (1).....	45
写真図版 5 柱穴状ピット・焼土、 火山灰検出状況.....	41	写真図版 10 出土石器 (2).....	46
		写真図版 11 出土石器 (3).....	47
		写真図版 12 出土石器 (4).....	48

（凡 例）



I 調査に至る経過

下醍醐遺跡は、「一般河川伊手川小規模河川改修工事」「原体地区担い手育成基盤整備事業」の施行に伴い、その事業区域内に位置する事から発掘調査することとなった遺跡である。

一般河川伊手川は、江刺市越路嶺に源を発して西流し江刺市伊手、藤里及び田原を経て水沢市羽田町において人首川に合流する河川である。流域面積は、85.4km²、全長は22.6kmで、流域は伊手川を挟み水田地帯が広がっている。

伊手川河川改修事業は、昭和48年度より、人首川合流点から上流2,500mの区間において、中小河川改修を実施し、昭和56年度に完成している。また上流御堂地区では、昭和63年度から局部改良事業に着手しており一連区間の浸水被害を軽減し民生の安定を図る目的で、田原地区では小規模河川改修事業として実施するものである。

当事業の施行にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、水沢地方振興局江刺農林事務所から平成8年10月4日付け江農土改第1679号「担い手育成基盤整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文書によって岩手県教育委員会に対して分布調査を依頼したのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成8年10月24日分布調査を実施したが、その結果は、平成8年11月13日付け教文第691号「担い手育成基盤整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（回答）」で水沢地方振興局江刺農林事務所へ回答し、その際当地区において5遺跡が確認された。水沢地方振興局土木部では、5遺跡のうち4遺跡について、平成9年3月10日付け水土第1815号「伊手川河川改修事業に係わる埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書によって岩手県教育委員会に依頼、平成9年10月23日試掘調査を実施しその結果は、平成9年11月5日付け教文第628号「伊手川河川改修事業に係わる埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、下醍醐遺跡（NE08-2047）の発掘調査が行われることになった。

II 立地と環境

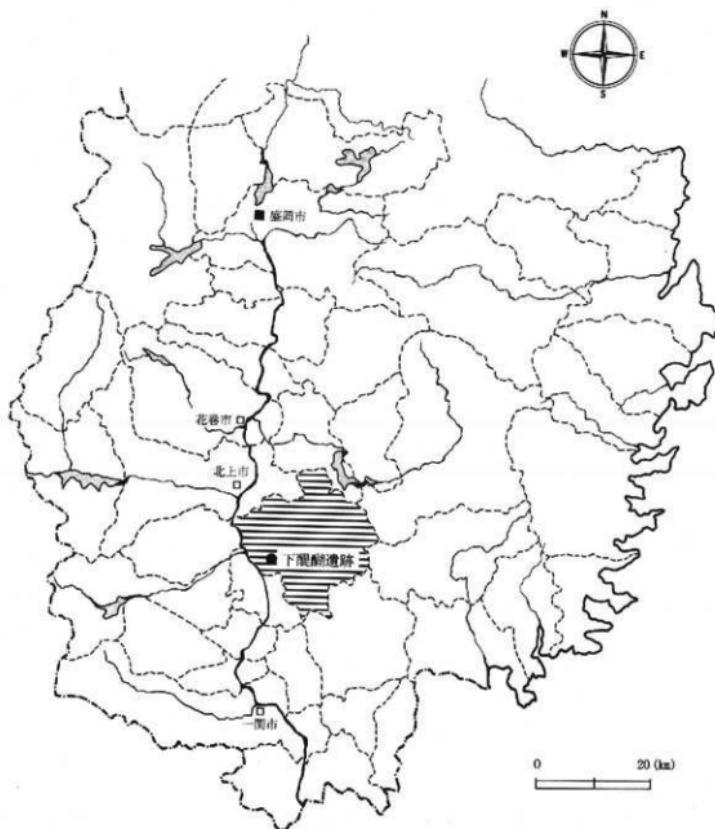
1. 遺跡の位置

下醍醐遺跡は、江刺市田原字高野前95ほかに所在し、東北新幹線水沢江刺駅から北東約3km、江刺市役所の南東約3.6km付近に位置する。北上川中流域の県南中央部にある江刺市は、北は北上市、和賀郡東和町、東は遠野市、気仙郡住田町、南は水沢市、東磐井郡大東町、西は水沢市、胆沢郡金ヶ崎町と隣接し、総面積360.77km²を有する。市内西側を東北新幹線、国道456号が南北に走り、市北端部を国道107号が、南部を国道397号がそれぞれ東西方向に通っている。遺跡はそれら幹線道路に挟まれた中央より南側の国道397号と平行して走る県道玉里一水沢線の醍醐橋北側にあり、3.5km先の北上川に注ぐ伊手川左岸の沖積地にのっている。北緯39°10'10"、東經141°12'37"付近である。

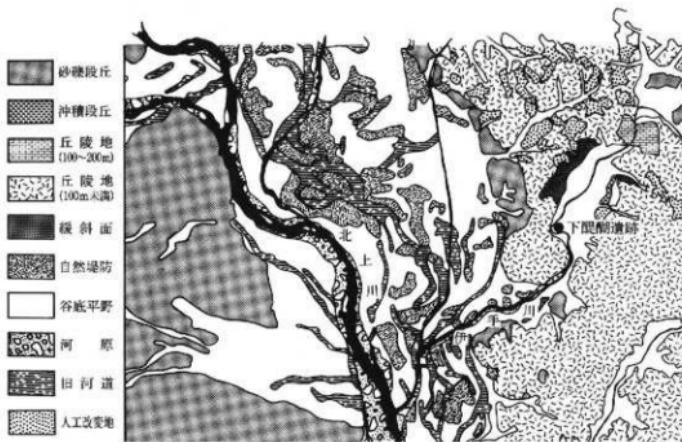
2. 地形と地質

当遺跡のある江刺市は大きく3分類される。東に大森山（820m）、物見山（870.6m）、阿原山（782.1m）、蓬萊山（787.8m）などの高山がそびえるのに対し、西は明神山、笠根山、阿茶山など500～600mの低山地が続く丘陵地帯となっている。これらに囲まれて北上川に注ぐ広瀬川、人首川、伊手川、小田代川、大

田代川が山地や丘陵地を流下しながら、沖積平野を形成している。下醍醐遺跡のある田原地区の中央部は阿原山を源とし、市南西部で人首川と合流する全長30km程の伊手川によって開拓された平地である。そうした平地は肥沃な土壤のうえに日照条件もよく、県下有数の稲作地帯である証拠に水田が整然と広がっている。遺跡は当地区のほぼ中央にあたり伊手川はここで大きく西流しており舌状の張り出しを形成している。普段の水量は多くないが、ほぼ360度蛇行する流路のために西側の右岸を常に浸食している。また雨天の日には短時間に水量が増えることから洪水の危険性もあり、古くから何度も浸水している地域もある。江刺平野の基盤は、新第三系鮮新統玉里層で下部は凝灰質頁岩・砂岩が発達しており、砂質部を挟んでいる。また上部には数層の亜炭層を挟む。田原地区については、この基盤に伊手川による洪水などの河川作用と思われる砂礫層が数層挟まり、自然堤防状の高まりも見られる。調査区域の標高は約46mである。



第1図 岩手県図



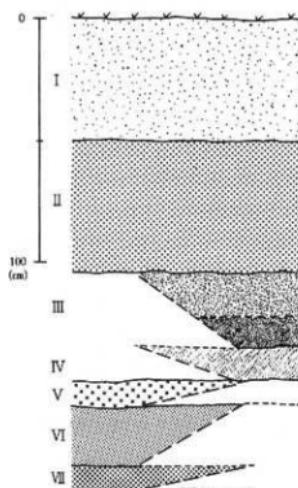
第2図 地形図

3. 基本層序

調査区内の土層については、堅穴状遺構などが検出された北側調査区（A～C区：グリット名）と焼土のみ検出され大半の遺物が出土した南側調査区（D・E区：グリット名）とでは、全く違った堆積状況である。ここでは、各調査区の土層をあげておく。

<北側調査区>

- I層 10YR3/1～10YR4/1 黒褐色～褐灰色シルト 粘性なし しまりなし 耕作土 20～50cm 下位に7.5YR5/8 明褐色 酸化鉄土 床土 5～10cm
- II層 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりなし 層状に砂混入 旧耕作土 下位に酸化鉄 10～55cm
- III層 上位7.5YR4/3 褐色火山灰 粘性なし しまりなし (2次堆積?) 0～15cm
下位10YR8/4 浅黄橙火山灰 粘性なし しまりなし (1次堆積?) 0～15cm
- IV層 2.5YR 3/1 黒褐色 シルト質砂混入 粘性あり しまりあり 下位ほど砂多く混入 0～15cm
- V層 10YR4/4 褐色シルト質 粘性なし しまりなし 0～10cm
- VI層 10YR3/3～3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりややあり 7.5YR5/8 明褐色 酸化鉄土散在 下位において径1～5mmの炭化物微量に含む 砂ブロック状に散在 土器片少數含む 0～25cm



第3図 北側調査区基本層序

VII層 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性あり しまりあり 径1~10cmの炭化物 所々集中して含まれる 砂ブロック状に散在 土器片散在 造構検出面 0~10cm

III層及びIV層が堆積している場所は調査区の東側一部のみでそれより下層はグライ化が進んでおり、V層～VII層については堆積していない。

<南側調査区>

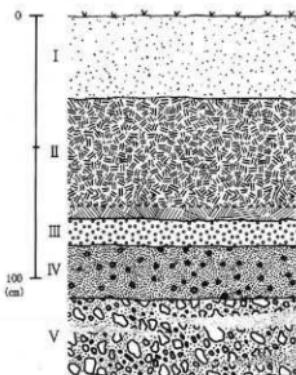
I層 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし しまりなし 草根多量入る 耕作土 30cm

II層 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまりややあり 10%含む 旧耕作土 土器多量に含む 下位10YR3/1 黒褐色砂 金雲母多量に含む 層状に酸化鉄土あり 50cm

III層 10YR4/1~3/1 黒褐色砂 粘性ややあり しまりなし 金雲母多量に含む 酸化鉄土層状にあり II層に含まれる 砂よりも粗い 10cm

IV層 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 粘性なし しまりなし 酸化鉄50%含む 10YR3/1 黒褐色砂シルト (粘性あり・しまりややあり) を層状に含む 金雲母多量に含む 下位ほど砂の粒が大 20cm

V層 10YR3/2 黒褐色砂・10YR5/4 にぶい黄褐色砂・10YR3/1 黒褐色砂・10YR5/2 灰黄褐色砂が斜状・帯状に交互に堆積 粘性なし しまりなし 下位ほど粗 35cm



第4図 南側調査区基本層序

4. 江刺市の遺跡

平成10年度の岩手県教育委員会の遺跡台帳によると江刺市では288カ所の遺跡登録がなされている。内訳としては、縄文時代が114カ所、弥生時代11カ所、古代100カ所、平安時代12カ所、中世60カ所など(全て重複あり)であるが、ほとんどの遺跡が複合遺跡である。

江刺市の旧石器時代の遺跡は大変少ない。そうした中で人首川を臨む段丘上にある岩谷堂大名野遺跡では局部磨製石斧、尖頭器が出土しているほか、北上川東岸の河岸段丘上に立地している稻瀬鶴羽台遺跡からはナイフ形石器が出土している。

縄文時代に入ると、丘陵や台地上に遺跡が見える。米里大谷地遺跡や藤里向畑遺跡では貝殻文土器が出土するなどで知られているが、この時期の本格的な調査は東北新幹線関係の発掘調査以降である。五十瀬神社前遺跡では縄文時代中期末葉の大木9式土器が多く出土しており、土器とともに竪穴住居跡や炉、ピットが検出されている。瀬谷子遺跡では集石遺構が検出されているが、出土している遺物は縄文時代中期末葉の大木10式土器を中心に縄文時代後期中葉、縄文時代晩期のものがほとんどである。

岩手県の弥生時代の遺跡の多くは胆沢平野に集まっている。江刺市内では、沼の上遺跡から弥生時代初期の遺構とともに土器が見つかっている。また、遺構は検出されなかったが、弥生時代中期前半の土器と石器が落合I遺跡から出土している。その他稻作文化を示すものとして粗痕のある土器が出土した兔II遺跡がある。この遺跡からは該期の遺構は検出されなかったが、弥生時代の各期の土器が多量に出土し、当地区的土器の変遷を垣間見ることができる。

古墳時代は胆沢町南都田に北限の前方後円墳である角塚古墳があり、水沢市内ではその築造時期に近い中半入遺跡や面塚遺跡など調査され始めているが、江刺市内ではまだ明らかではない。角塚古墳よりやや新しくなって兔Ⅱ遺跡では、奈良時代末～平安時代前半の竪穴住居跡4棟が検出しており、それ以降は数多くの遺跡で豊富な資料を提供している。

平安時代初期の集落跡といえば竪穴住居跡が16棟検出された落合Ⅲ遺跡や29棟検出された力石Ⅱ遺跡注目される。特に力石Ⅱ遺跡では1つの住居跡から武器である鉄鏃を含む鉄製品が10点を超えて出土しており、また2個の石帯出土など、律令体制との関わりを示す重要な遺跡である。9世紀初頭から10世紀後葉まで時期区分が可能な遺構や遺物が出土しているのは宮地遺跡である。23棟の住居跡に伴う遺物などにより4期に分けられている。落合Ⅱ遺跡では約240個体にのぼる墨書き土器や木簡、灰釉陶器などが出土しており、一般集落ではなく江刺郡衙跡の地域であったことを示している。落合Ⅰ遺跡では9世紀後半～11世紀代にかけての竪穴住居跡の他に、土師器窯の自給自足をしたとみられる遺構も確認されており、自給自足を旨とした古代集落の有様をみることができる。その他9世紀～10世紀末にかけての住居跡は朴の木造跡、谷地遺跡、鴻ノ巣館、兔Ⅱ遺跡、この時期の遺物は力石遺跡、中屋敷遺跡などで確認されている。市内北西に位置する瀬谷子窯跡群では数多くの須恵器焼成窯が見つかった。大部分は半地下式無階無段登窯であるが、中には平窯・有階有段登窯もあり、また調査の結果須恵器のほかに瓦を焼いた窯も存在することがわかり、胆沢城経営さらには近隣集落に必要な生活雑器を供給したとみられている県内最大の生産遺跡である。

中世以降の遺跡については、現在70カ所ほど知られているが、調査例が少なく実態は不明である。

下醍醐遺跡の南方に醍醐寺跡とされる伝承地がある。京都山科の醍醐寺の上醍醐、下醍醐の地名と寺社名をとった地と言わわれている。開田される以前は台地上に绳文時代中期頃の土器片が多量に出土し、10世紀頃と考えられる須恵器片も表採され、寺院跡・坊舎跡とみられる段々状の地形も残っていたようである。現在は畑地であった場所を掘削・削平などをし開田したため以前の段々状の台地はおもにかけを残すのみとなつた。それでも唯一残っている畑地では今でも绳文時代中期の土器や土師器が小破片であるが表採できる。

そのほか北西には藤原経済が築いたとされる豊田館（豊田城）跡、藤原経清塚とされる五位冢古墳群、北には虚空蔵遺跡、昭和63年に調査された松川遺跡がある。松川遺跡では8世紀末～9世紀前半代と見られる集落の他に绳文土器、弥生土器、住居跡に伴う土師器、須恵器、中国青磁なども出土している。

＜参考文献＞

- 1985 「岩手県」角川日本地名大辞典3 角川書店
- 1990 「岩手県の地名」日本歴史地名大系3 平凡社
- 1969 岩手県江刺市瀬谷子窯跡群 緊急調査概要 窯業史研究所
- 1970 岩手県江刺市瀬谷子窯跡群 第2次緊急調査概要 窯業史研究所
- 1977 沼の上遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第5集 埋岩手県埋藏文化財センター
- 1979 主要地方一閣北上線関連遺跡発掘調査報告書第8集 埋岩手県埋藏文化財センター
- 1979 東北新幹線関係埋藏文化財調査報告書I 岩手県文化財調査報告書第33集 岩手県教育委員会
- 1980 東北新幹線関係埋藏文化財調査報告書IV 岩手県文化財調査報告書第48集 岩手県教育委員会
- 1980 東北新幹線関係埋藏文化財調査報告書V 岩手県文化財調査報告書第49集 岩手県教育委員会
- 1980 東北新幹線関係埋藏文化財調査報告書VI 岩手県文化財調査報告書第50集 岩手県教育委員会



第5図 遺跡位置及び周辺の遺跡図

水沢・北上 1 : 50,000

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	時代
1	大原	散布地	縄文土器(晚期)	縄文
2	雲南田	散布地	縄文	縄文
3	丸田Ⅱ	散布地	須恵器	平安
4	大名野	散布地	土師器、須恵器、縄文土器(晚期)、石斧、石槍、石匙、石鎌	縄文・古代
5	丸田Ⅰ	散布地	縄文土器、石鎌、剝片	縄文
6	中野	散布地	縄文壺(晚期)	縄文
7	根岸洞穴	洞穴	縄文土器(中期)、石鎌、石盤、曲玉	縄文
8	宝生寺跡	寺院跡	縄文土器(中・晚期)、須恵器、土師器、石鎌、布目瓦	縄文・古代
9	東間	集落跡	須恵器	古代
10	岩谷堂城	城郭跡	本丸、二の丸、三の丸、帯郭	中世
11	裏手丘上古墳	古墳	塚	
12	鶴音堂冲Ⅰ	散布地	須恵器、土師器、ハゲ日の骨壺	古代
13	宮地	集落跡	土師器、須恵器	古代
14	三百刈田	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・古代
15	萬合	集落跡	土師器、須恵器、木製品、陶磁器	古代・中世
16	寺田	散布地	土師器、須恵器、弥生	弥生・古代
17	寺田Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器	縄文・古代
18	後田Ⅰ	散布地	土師器	古代
19	豐田城	城郭跡	土師器、須恵器	古代
20	五位塙古墳群	古墳群	塚	
21	虛空藏	散布地	土師器	古代
22	高野前	散布地	土師器	古代
23	櫻湖寺跡	散布地	縄文土器、弥生土器	縄文・弥生
24	内籠Ⅱ	散布地	縄文土器、石器、土師器	縄文・平安
25	藤の森古墳	古墳	塚	
26	勝軍寺跡	寺院跡	縄文土器(中・晚期)、土師器、須恵器	縄文・古代
27	妻の神古墳	古墳	縄文土器(後期)、人骨	縄文
28	虚空藏館	城郭跡	塚、土器	中世
29	右山	散布地	須恵器	古代
30	後出里	散布地	土師器	古代
31	力石	散布地	弥生、土師器、砾石、焼土	弥生・古代
32	種ノ巣館	城郭跡、集落跡	土師器、須恵器、住居跡、塚	(平安)・古代
33	力石Ⅱ	散布地	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	縄文・古代・中世
34	力石Ⅲ	集落跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	縄文・弥生・古代
35	中崩敷	散布地	土師器、須恵器	古代
36	前広田	散布地	土師器	古代
37	御免	散布地	縄文土器	縄文
38	松川	散布地	土師器、須恵器	古代
39	鹿野	散布地	縄文土器	縄文・平安
40	羽黒堂	散布地	石鎌	縄文
41	羅田	散布地		平安
42	外浦洗田Ⅱ	窪跡	須恵器	平安
43	四丑	占殿場		
44	中前田	集落跡	弥生土器、土師器、須恵器	弥生・平安
45	北田Ⅱ	散布地	土師器、鐵滓	弥生・奈良・平安
46	野田	散布地	土師器、石鏡	縄文・平安
47	北田Ⅲ	散布地	弥生土器、内墨、土師器	弥生・平安
48	杉の堂	散布地	縄文土器(後・晚期)、大洞、実形品、壺、深鉢、注口	縄文・平安
49	沼尻	散布地	土師器	平安
50	大学Ⅰ	集落跡	土師器、須恵器、フレーク	縄文・平安
51	右名坂	集落跡	縄文土器、石鎌	縄文
52	大内田前	散布地	土師器、須恵器	平安
53	鶴ノ木新田南	散布地	縄文土器	縄文・平安
54	鶴ノ木新田上	散布地	チップ	縄文
55	鶴ノ木南台地	散布地	縄文土器、アメリカ式石鎌、すり切り石斧	縄文・弥生
56	鶴ノ木佐吉	散布地	縄文土器(前・中・晚期)、土師器、須恵器、打製石斧、菅管、柱穴状ビット	縄文
57	日坂森東	散布地	縄文土器(中期)	縄文
58	日坂森	散布地	縄文土器(中期)、石鎌、石斧、石棒	縄文
59	北鶴ノ木西	散布地	石鎌、打製石斧	縄文
60	北鶴ノ木方八丁	城郭跡	縄文土器、壠、複郭、平場	縄文・中世
61	旧羽田中	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・平安
62	鍋瀬	散布地	縄文土器、石器	縄文
63	水無沢	散布地	縄文土器、石器	縄文
64	大田代城	城郭跡	平場、郭、塹	中世
65	秀箱(とひが森館)	城郭跡	平場、帯郭、塹	中世
66	館ヶ森館	城郭跡	井戸	中世

第1表 周辺の遺跡表

III 調査方法と整理方法

1. 野外調査

1) グリットの設定

調査区内において、調査上最適でかつ公共座標の第X系の区切りの良い値である地点を基準点1とし、そこから同Y座標軸で南へ40m延長したところに基準点2を設けた。また、道路を挟んでそれぞれ単独で調査可能のように基準点2から東へ20m延長したところに補点1を、同様に基準点1から西へ16m延長したところに補点2を、北に60m延長したところに補点3を設けた。

大グリットは、この基準点1・2が起点になるように、北から40m間隔でA・B・C・D・Eとアルファベットを、東から西にI・IIと昇順する数字を当てて組んだ。さらに4m間隔で東西・南北をそれぞれ10等分し、南北をa・b・c・・・・とアルファベットを、東西を1・2・3・・・・と昇順する数字を当て小グリットとした。基準点及び補点の座標軸の値と杭高は次の通りである。

基1	X = -92,400.000	Y = 32,580.000	H = 46.322m
基2	X = -92,440.000	Y = 32,580.000	H = 46.323m
補1	X = -92,440.000	Y = 32,600.000	H = 46.264m
補2	X = -92,400.000	Y = 32,564.000	H = 46.482m
補3	X = -92,340.000	Y = 32,580.000	H = 46.712m

2) 粗掘と精査

調査区は南北に細長く細かく区切るように東西に現水田の畦畔が走る。まず遺物出土状況及び遺構検出面の把握のために、各水田ごと東西にトレーンチを入れた。また北側は調査幅が狭くなり、水田ごとの段差が多少あったため、断ち切るように南北に数本トレーンチを入れた。その結果、北側調査区では表土から遺構検出面までかなりの厚さがあり、また遺物もほとんど出土しないため、重機により遺構検出面の直上の層まで下げた。南側調査区は表土を剥ぐと遺物が多く含まれる層になるため、表土のみ重機により除去することにした。その後人手によりこの層を徐々に下げ遺構検出に努めた。

精査は、基本的に2分法による埋土の観察を行った。また、堅穴状遺構など面的に広がりを持つ場合には4分法を用い観察を行った。個々の遺構が面的に不明で重なりを持ちそうな部分については一部トレーンチをいたところもある。

遺物の取り上げは、遺構内からの出土は遺構名と埋土層位を記入し、遺構外の場合は小グリット単位で層位を記入して取り上げている。調査初期のトレーンチ入れの際に出土した遺物は、その時点においてまだ小グリットは設定していないため、トレーンチ名・層位のみで取り上げ、後にグリット名を入れたものもある。

3) 遺構の記録

遺構の記録には、主に実測図作成と写真撮影により行い、実測図に表現できないものにはフィールドカードに記録した。作図は座標系にあわせた1mメッシュを基本とする簡易造方測量と平板測量と両方を用い、遺構の平面形、焼土・遺物の検出状況を記録した平面図、遺構の埋土堆積状況や遺物の出土状況を記録した断面図を作成した。縮尺は基本的には20分の1とし、作図上40分の1、60分の1で作成したものもある。

写真は、遺構の埋土堆積状況、まとまって遺物が出土した場合にはその出土状況、遺構の完掘状況（焼土については検出状況を含む）というように精査の段階ごとに撮影している。フィルムは35mmのモノクロームと

リバーサルフィルム、さらにモノクロは6×7判のものも使用した。

2. 整理方法

図面の点検・遺物の洗浄・写真的整理は、原則として野外調査と並行して行うことにしたが、調査終了間際に出土した遺物及び写真など一部は野外調査終了後に行った。

1) 遺構図面

遺構図面は、点検後に第2原図を作成した。挿図中の縮尺は40分の1を原則とし、任意の縮尺についてはスケールを付してある。なお、使用したスクリーントーンの種類は目次の項の末尾に示した凡例のとおりである。

2) 遺物

遺物は、洗浄後全出土遺物を点検し、遺構内外に分けて注記・接合・復元を行い、その後報告書に掲載するものを選択、登録を行った。そして、写真撮影・実測（土器の場合拓本も含む）・トレース・図版作成と作業を進めた。

報告書に掲載した遺物の選択基準は、遺構内出土については磨滅や欠損部分が多く文様等が不明なもの以外はできる限り掲載するようにし、遺構外出土については、接合復元で実測可能になったもの、口縁部資料として原形が推測できるものを選択・掲載した。

石器については、遺構内出土は製品のもの全て、遺構外出土は剥片石器などは欠損部のないものを選択、礫石器は数が少ないと認め全て掲載することにした。観察表には報告書中に掲載した全ての遺物を記載している。挿図中の縮尺は土器3分の1、石器は2分の1を原則としているが、任意の縮尺については各図版中にスケールを付してある。

3) 写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルムの規格ごとにモノクロはネガアルバムに、リバーサルフィルムはスライドファイルに整理した。いずれも撮影順に整理し台帳に記載した。遺物写真は、土器については接合状況の良好で立体写真の可能なものの、小破片、土製品の順に、石器については土器の後に石礫などの剥片石器、礫石器などの大きい石器、石製品の順に35mmフィルムで撮影し、現像した。その後遺物の撮影順にネガアルバムに整理を行った。なお、遺物撮影は当センターの写真技師が担当した。図版中の縮尺は、土器は3分の1、石器は2分の1を原則としているが、礫石器などに収まりきれない石器はさらに縮小しており、任意の縮尺については各写真図版中に示してある。

IV 調査結果

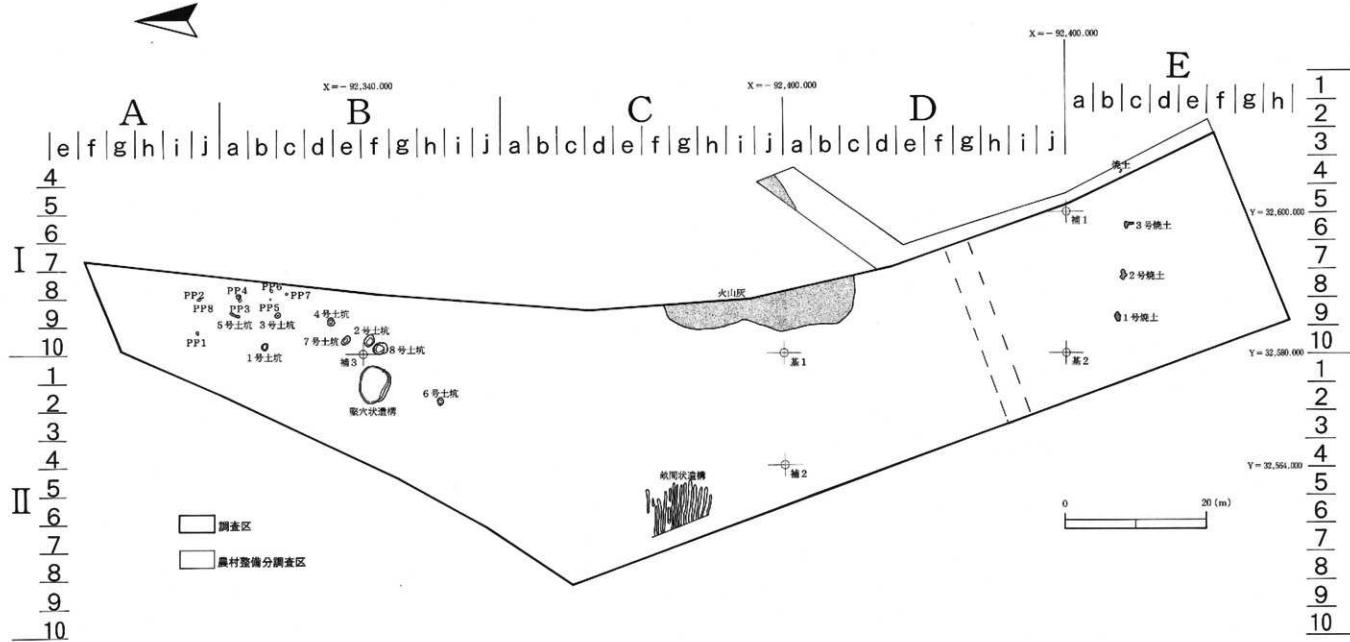
1. 調査概要

調査区は伊手川沿いに南北に長く伸びている。東西方向に長い10枚を超える水田が北側を除いてさほど段差を持たず、一部は蒲などができる休耕田となっている。調査区内やや南寄りに農道が東西方に通っておりそれを境に任意的に北側を北側調査区、南側を南側調査区として調査を進めた。遺構検出面までの土層は両調査区において全く違った様相を見せている。北側調査区では伊手川の洪水等による堆積土が厚く、遺構検出面まで1m以上あった。遺構は、竪穴状遺構が1棟、土坑が8基、柱穴状ピットが8基、畝間状遺構が1カ所である。遺物は遺構内外より縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。これに対し南側調査区では、表土の下に昭和30年代のは場整備による客土があり、この客土に縄文時代中期の土器が多く含まれていた。また、遺構としては現地性ではないが、同じ客土の中から焼土が3基検出されている。客土を剥ぐと砂層となり遺構は検出されなかった。

調査区の中央部には表土から約1m20cmほど下がったところで十和田a降下火山灰と見られる火山灰が堆積している。上層は若干赤みのある褐色火山灰がのっており、その下には黄色みがかる浅黄橙色火山灰が薄く堆積している。状況からみてこの下層が1次堆積で時間をおかずに2次堆積したものとみられる。遺物は火山灰よりも上の層からは出土せず、火山灰の下層もまた厚くグライ化した層が続くのみで遺物は出土しなかった。トレンチを数本入れてみたが、この区域での遺構の存在の可能性は見られなかった。



第6図 遺跡周辺図

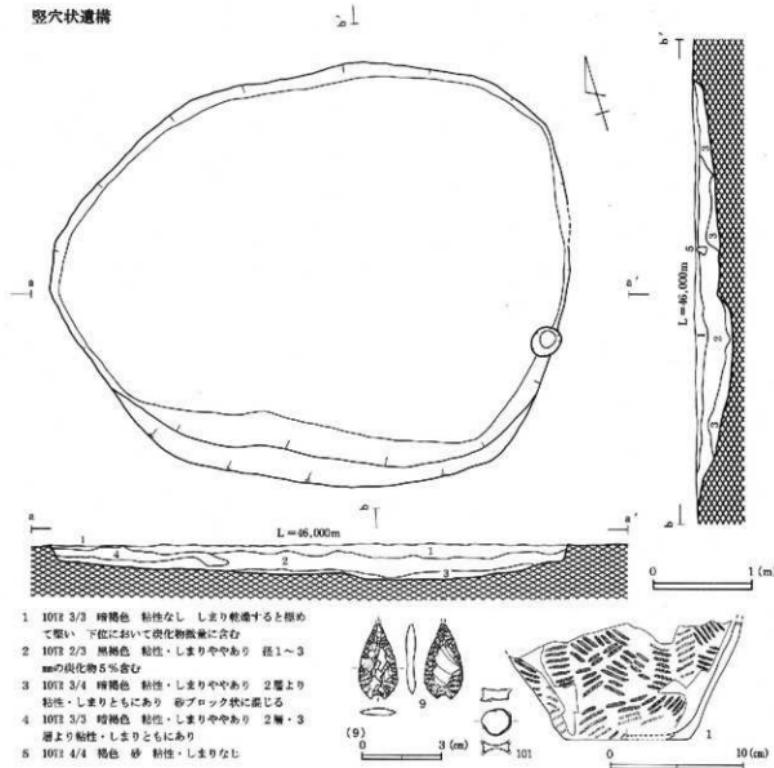


第7図 遺構配置図

2. 遺構

1) 壊穴状遺構(第8図)(遺物一第8図、写真図版6・8・9)

II B 1 f ~ II B 2 f グリット内から検出された。規模は長軸 5 m 14 cm、短軸 4 m 39 cm の梢円形である。深さは 40 cm ほどであるが、壁が約 19 cm でやや中央に向かって深くなるすり鉢状である。炉や焼土は検出されなかつた。南東に壊穴状遺構と同様の埋土が堆積した柱穴状ピットが 1 基検出されているが、この遺構に直接関係のあるものかは断定できない。地山そのものが砂層であるために遺構の床面もさほど踏み固められているような硬さはなかった。遺物は縄文時代晚期中葉と見られる深鉢土器が出土地している。接合できたのは掲載した底部から胴部にかけてのみである。また、径 2 cm ほどの中央部を両側からくぼめた耳栓と考えられる土製品が出土した。その他、同層から先端部が一部欠損している石錐 1 点が出土している。埋土は 3 層あり、2 層中に土器が含まれる。3 層目は埋土と 2 層の混土である。



第8図 壊穴状遺構・出土遺物

2) 土 坑

< 1号土坑 > (第9図)

I B 10 b グリット内に検出された。他の土坑と違い検出作業開始早々確認できたものである。規模は長径105cm、短径85cmの楕円形で底部は長径40cm、短径25cm、断面形はすり鉢状である。深さは約29cm、埋土は4層確認できたが、下層は砂質の土が入り込み一気に埋まった様子が見られる。遺物は出土していない。検出状況から堅穴状遺構よりは新しい時期のものと考えられる。

< 2号土坑 > (第9図)

I B 10 f グリット内で検出された。西側には堅穴状遺構が、またすぐ南側には8号土坑が検出している。規模は長径157cm、短径139cmの楕円形で底部は長径116cm、短径75cm、断面形はすり鉢状で深さは約27cmである。埋土は堅穴状遺構や8号土坑と類似しているが、これらの遺構と違い遺物は出土していない。床面のしまりはあまりない。

< 3号土坑 > (第9図)

I B 9 c グリット内で検出された。規模は長径86cm、短径69cmの楕円形で底部は約22cm、断面はすり鉢状を呈しており、深さは約32cmである。底部の状況から柱穴状ピットかとも思われたが、柱あたり等は確認できず土坑扱いとした。1号土坑と同様埋土下層は砂混じりの土である。遺物は出土していない。

< 4号土坑 > (第9図)

I B 9 d グリット内で検出された。規模は長径115cm、短径107cmのほぼ円形を呈しており、底部は長径71cm、短径37cm、断面形はピーカー状で深さは約23cmである。調査区や東よりに検出された遺構だが、当初もう少し大きい遺構と思われた。しかし、精査を進めると上の層の土が散在している状況で結果的に掲載している規模となった。この周辺には同様の土が見られ、遺構が重複している可能性があったが、精査を進めるといずれも遺構にはなり得なかった。遺物は出土していない。

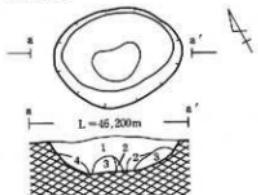
< 5号土坑 > (第9図)

I B 9 a グリット内で検出された。規模は長径146cm、短径37cmの溝状で、他の土坑と平面形が異なっている。底部は長径126cm、短径26cm、断面形はすり鉢状で、深さは約12cmと大変浅い。形状からみると、陥し穴状遺構のようであるが、この遺構の他に同様の形状の遺構は検出しておらず、また立地状況など陥し穴状遺構とするための判断材料に乏しく土坑扱いとした。遺物は出土していない。

< 6号土坑 > (第9図) (遺物—第9図、写真図版6)

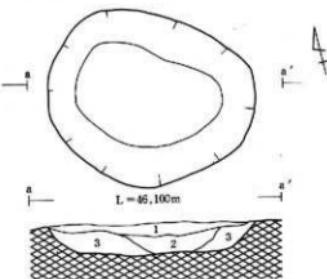
II B 2 h グリット内で検出された。この遺構は他の遺構検出面よりも若干高い面で検出された。この遺構の東南方向では土師器片が集中して出土したが、遺構は確認することができなかった。6号土坑からは埋土上位から土師器ではなく繩文土器片が出土している。ただし、出土層位からこの遺構の時期決定には至らない。規模は長径98cm、短径81cmのほぼ円形を呈しており、底部は長径75cm、短径66cm、断面はすり鉢状で、深さは約18cmである。

1号土坑



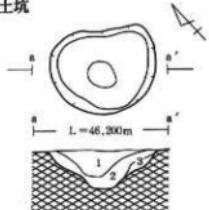
- 1 10T3 3/4 粘褐色 粘性あり しまりあり
砂ブロック状に含む
- 2 10T3 3/3 粘褐色 粘性・しまりあり 1層よりあり
炭化物径1~5mm 1%程度含む
- 3 10T3 4/4 黄色 粘性・しまりあり 1層と同程度
砂混じり
- 4 10T3 4/4 黄褐色 粘性・しまりなし

2号土坑



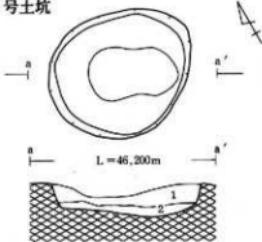
- 1 10T3 3/3~3/4 粘褐色 粘性・しまりあり 炭化物
飛灰に含む
- 2 10T3 3/4 粘褐色 粘性・しまりあり 1層よりしま
り弱 炭化物微細含む 金銀鉱の量が1層より多い
若干砂が混じる
- 3 10T3 3/4 粘褐色に10T3 4/4 淡褐色がブロック状で少
量入る 粘性・しまりあり 1層よりしまり弱

3号土坑



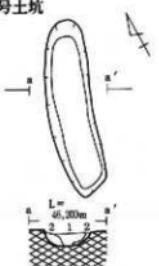
- 1 10T3 3/3 黒褐色 粘性ややあり しまりややあり
径5~10mm程度の块状物5%含む
- 2 10T3 4/4 黄色 粘性ややあり しまりなし 砂混じ
り
- 3 10T3 3/4 粘褐色 粘性ややあり しまりなし 砂混
じり

4号土坑



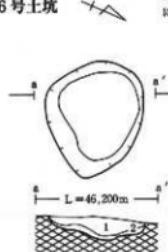
- 1 10T3 3/3 粘褐色 粘性あり しまりあり
炭化物飛灰に含む
- 2 10T3 3/4 粘褐色 粘性・しまりややあり
10T3 3/4 粘褐色砂が飛灰に散在 炭化物ブロック状
に含む

5号土坑



- 1 10T3 3/3 粘褐色 粘性・しまりややあり
炭化物飛灰に含む
- 2 10T3 3/3 粘褐色 粘性・しまりあり
10T3 3/4 粘褐色砂多少含む

6号土坑



- 1 10T3 3/3 粘褐色 粘性・しまりややあり
炭化物飛灰に含む
- 2 10T3 3/4 粘褐色 粘性・しまりややあり 1層より
しまり弱 砂混じり 地山と1層の断続層

0 2(m)

6号土坑出土遺物



0 5(m)

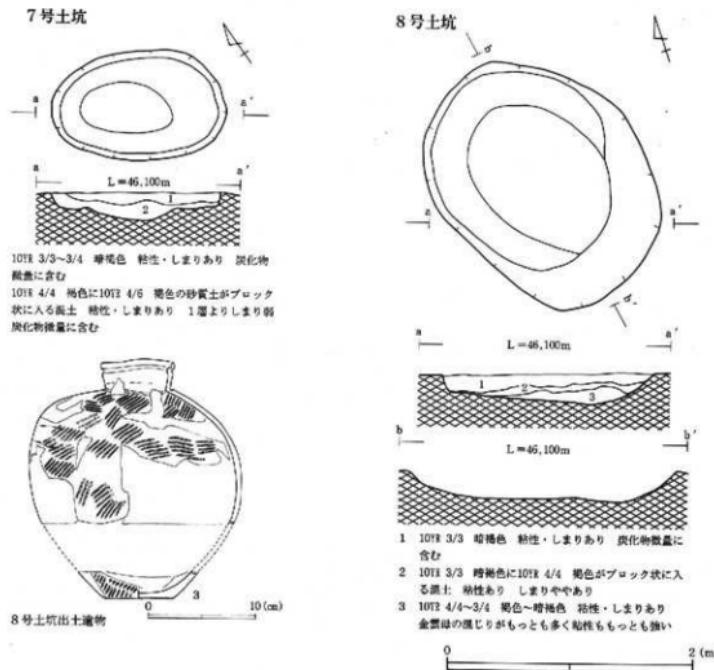
第9図 1号土坑～6号土坑

<7号土坑> (第10図)

I B10 e グリット内で検出された。規模は長径145cm、短径90cmの楕円形で底部は長径77cm、短径42cm、断面形はすり鉢状を呈しており、深さは約23cmである。竪穴状遺構の東隣に検出されており、当初重複のある土坑のように考えられたが、結局は1基となった。遺物は、西側壁際よりまとまって出土した。縄文時代晩期中葉とみられる蓋である。胴下半部は欠損しているが、同個体の底部とみられる破片が同一場所より出ている。小破片で出土したせいもあるかもしれないが、ゆがみが著しい。口縁部内外面に沈線が1条ずつ巡る。外面の調整は雄で輪積痕が胴部～口縁部まで残るが、内面については丁寧にナデつけされている。胴部にはL R 単節縄文が施されている。

<8号土坑> (第10図) (遺物—第10図、写真図版 6)

I B10 f グリット内で検出された。規模は長径208cm、短径163cmの楕円形で底部は長径135cm、短径97cm、断面形は一部すり鉢状で深さは約25cmである。竪穴状遺構の東隣に検出されており、当初重複のある土坑のように考えられたが、結局は1基となった。遺物は、西側壁際よりまとまって出土した。縄文時代晩期中葉とみられる蓋である。胴下半部は欠損しているが、同個体の底部とみられる破片が同一場所より出ている。小破片で出土したせいもあるかもしれないが、ゆがみが著しい。口縁部内外面に沈線が1条ずつ巡る。外面の調整は雄で輪積痕が胴部～口縁部まで残るが、内面については丁寧にナデつけされている。胴部にはL R 単節縄文が施されている。



第10図 7号土坑・8号土坑・出土遺物

3) 焼土

3基検出されているが、いずれも南側調査区より検出されたものである。南側調査区の客土から出土した土器は、ほとんどが縄文時代中期後葉にあたるものであり、その中から検出されたこれら焼土も同時期の遺構であった可能性がある。

<1号焼土> (第11図)

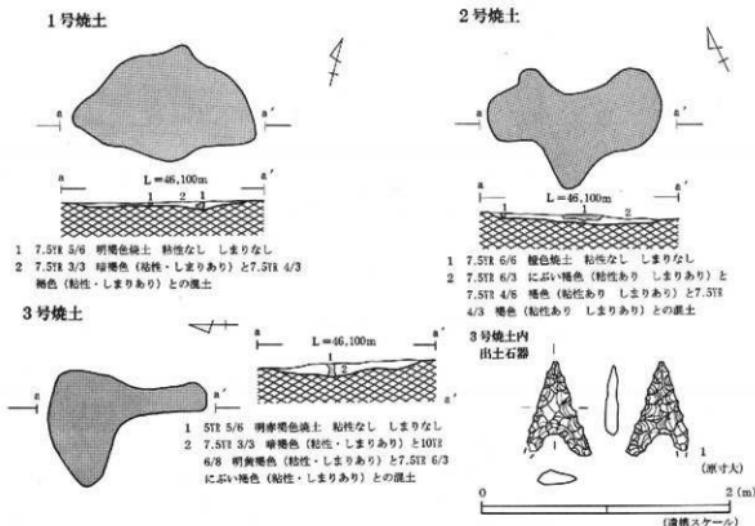
I E 9 b グリット内で検出された。規模は長径147cm、短径88cmの不整形で、焼土の厚さは約6cmである。客土の中から見つかっており、現地性のものではなく土器とともに場整備時に持ち込まれたものと見られる。

<2号焼土> (第11図)

I E 8 c グリット内で検出された。規模は長径140cm、短径57cmの不整形で、焼土の厚さは約5cmである。1号焼土と同様現地性のものではない。

<3号焼土> (第11図) (遺物—第11図、写真図版9)

I E 6 c グリット内で検出された。規模は長径131cm、短径21cmの不整形で焼土の厚さは約12cmである。1号焼土や2号焼土と比べて厚さは若干あるが、やはり3号焼土も現地性のものとはいせず、客土とともに他から持ち込まれたものといえる。埋土より回基無茎の石鏃が1点出土している。一部欠損しているが丁寧に作られている。



第11図 1号焼土～3号焼土・出土遺物

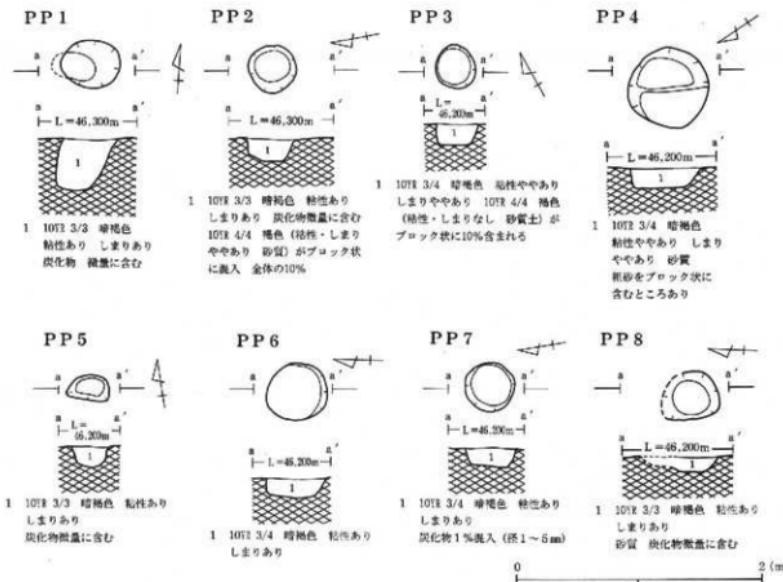
4) 柱穴状ピット (第12図)

全部で8基あるが、全て北側調査区から検出されている。それぞれの規模は第2表の通りである。pp 4とpp 8は重複しており、pp 4の方が新しい。これらの柱穴状ピットは建物跡になるようなつながりは持たなかったが、豊穴状構造や土坑が検出された周辺での検出である。

遺構名	検出地点 グリッド	規 模 (上端×下端)	深さ cm	遺 物	遺構名	検出地点 グリッド	規 模 (上端×下端)	深さ cm	遺 物
pp 1	I A 10 j	48 × 40	35	無	pp 5	I B 9 b	33 × 20	17	無
pp 2	I A 9 j	40 × 26	19	無	pp 6	I B 8 b	50 × 45	15	無
pp 3	I B 9 a	32 × 27	17	無	pp 7	I B 8 c	40 × 34	16	無
pp 4	I B 8 a	66 × 56	16	無	pp 8	I A 9 j	45 × 30	12	無

* 規模の単位はcm

第2表 柱穴状ピット表

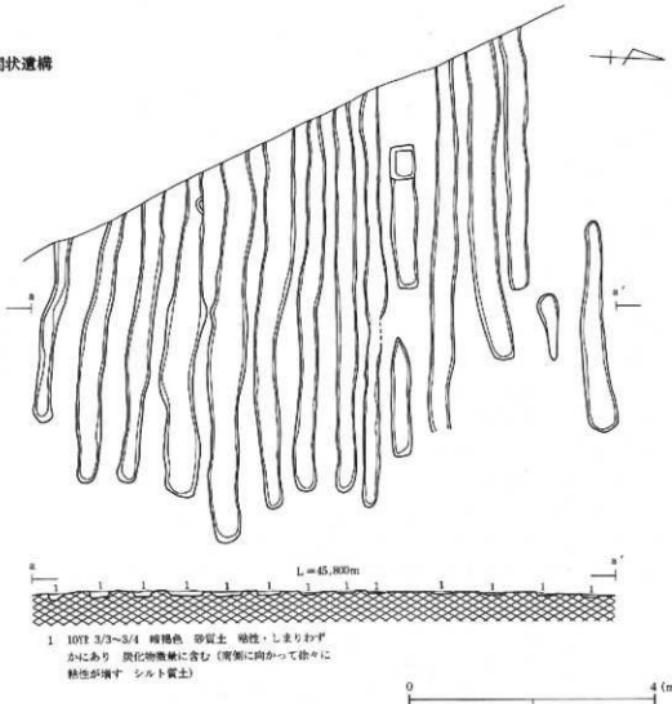


第12図 柱穴状ピット (pp 1 ~ pp 8)

5) 故間状遺構 (第13図)

II C 5 f ~ II C 5 g のグリット内で検出された。調査区のはば中央部にあたるこの区域は遺構も遺物も出土しない区域である。周辺は伊手川の洪水等によると見られる砂層が幾層にも重なって堆積しており、この遺構も砂層で覆わされていた。この遺構の見つかった範囲は周辺よりも若干高くなっており流されず残ったものかもしれない。10m × 6m の範囲で溝状に14条見つかっている。溝の長さは1m 10cm ~ 6m 80cm とばらつきがある。軸方向はどの溝もほぼ同方向で、幅は20cm ~ 55cm、深さは全体的に浅く南側から北側に向かって徐々にさらに浅くなっている。最も深いところでも13cm しかない。検出当初は畑跡とも考えられたが、そうした場合、歴幅が10cm ~ 45cm と1本の歴の中でも幅の違いがかなりあり、作付けを行った歴跡とは考えにくい。川の氾濫後の砂取りの溝跡ではないかとの指摘もある。地山は砂地だが根菜類であれば作付け可能であるという地元の話を聞く限りでは水田よりも畑があった可能性が高い。群馬県や静岡県の遺跡では、火山灰降下による軽石や洪水砂で埋もれた畑に復旧作業を施したと見られる遺構が検出されている。当該遺構もすぐ側に伊手川が流れおり、前述したとおり何度も氾濫しているのでその砂を搔き取る作業跡と考えた方が自然かもしれない。遺物は遺構内はもちろん遺構周辺からも一切見つかっておらず時期の決定はできない。

歴間状遺構



第13図 歴間状遺構

3. 遺構外遺物

1) 北側調査区（第14図4～13、写真図版6）

主な遺構が検出された北側調査区は全体として遺物が少ない。しかし、時代は一様ではない。時代ごとに大まかに分類できるが、詳しくは「南側調査区」の項で述べる。4は縄文時代中期と見られる深鉢の下半部である。5・6は縄文時代後期の十腰内I式併行の深鉢の口縁部と胴部であるが、同一個体である可能性が高い。竪穴状遺構付近より出土している。9は、調査区西側際の黒褐色シルト質土が堆積していた区域より出土したものである。口唇部には刻目状の押圧痕が巡る。口縁部は磨り消しがなされ、肩部下半はL字単筋が施される。文様等から縄文時代晩期中葉の土器と考えられる。10～13は平安時代の遺物である。10は底部外面と胴下半部がケズリ調整がなされ、胴下半部がふくらみをもつ土師器の壺である。11は同じく土師器の壺であるが、底部は糸切り痕が若干残る。12は、回転糸切り痕の残る土師質須恵器の壺の破片である。体部は丸みを持ち、口縁部で多少外反し、丸縁となっている。

2) 南側調査区

前述したとおり、今回の調査の中で大半の土器が出土した調査区である。出土内容は縄文時代中期後半の土器が多くを占める。

第Ⅰ群 縄文時代中期（第14図14～第16図78、写真図版6）

大半の土器がこの縄文時代中期後半の時期に当たるが、小破片が多く磨滅の著しいものがほとんどである。その中で破片ながら文様等の残りのよい土器は以下のように若干だが分けることができる。

a類 沈線により渦巻き模様を描き、渦巻きに囲まれた部分にも縄文が残されているもの。

16・17の内湾する口縁部は折り返しがなされ、厚みを持っている。大木9式よりも古手の様相が見られる。

b類 渦巻きの文様が沈線ではなくて、隆帯によって表現されているもの。このグループは、1-14・21・23などa類同様渦巻きに囲まれた部分にも縄文が残るものと、2-15・19・20・22など渦巻き文様の部分は磨り消しがなされ隆帯が口縁部で盛り上がるものとに分けられる。これらの中には刺突が施されているものもある。26は15と同一個体である可能性が高く、このグループに入るが、内面の口唇部近くには、穿孔しようとしたと見られる痕が残っている。

c類 隆帯で施された渦巻き状の文様が縱方向に伸び、逆U字状になるもの。逆U字状になると隆帯の太さが細めになり、容量の小さいものは沈線で描かれる傾向が見られる。72は、底部と胴下半部の部分破片で雖ではあるが、細い沈線による逆U字状の文様が残っている。75も72と同様細い沈線により逆U字状の曲線が見られるが全容は不明である。

d類 その他の土器

このグループには、撚糸文格子状に施文したものや縦方向に細い条線を施文したものなどが含まれる。

第Ⅱ群 縄文時代後期（第14図79～80、写真図版8）

縄文時代後期と見られる土器の出土は少ない。79・80は、後期前半と見られる深鉢の口縁部破片で、波状口縁となるものである。多条の沈線が口縁部に沿って施され、内面にも平行沈線が描かれている。

第Ⅲ群 縄文時代晩期（第14図9、写真図版6）

縄文後期の土器と同様、出土数は大変少ない。掲載できる破片は遺構内の1点のみである。口唇部を刻み目状に押圧している。

第IV群 平安時代の土器（第16図81・82、写真図版8）

このグループの土器も大変少ない。81は内面を黒色処理された土器器坏の体部破片である。82は、須恵器甕の口縁部破片である。内面には自然釉がかかっている。

3) 土製品（第16図102～110、写真図版8）

土製品は遺構内出土も含めて10点出土しており、土器と同様南側調査区から主に出土している。掲載した円盤形土製品は7点である（102～110）。径4.7cm～2.6cmである。磨滅が著しいが、いずれも土器の胴部を用いており、繩文がかすかに残る。109はキノコ形土製品である。上部は丁寧に表面をなでた後、時計回りと逆回りの渦巻状に沈線がやや深めに巡っている。笠の付け根には本物のキノコの石づき部分を表すような痕跡が見受けられるが、大部分欠損してしまっている。比較的丁寧に作られている。110は土偶破片である。腹部のみで縱方向に刺突列が施されている。腹部を強調させる突出部分以外は平らであり、繩文時代中期末の土器と多く出土する土偶に類似している。

4) 石 器（第17図～第22図、写真図版9～12）

石器は全部で土器と同様、南側調査区からの出土が多い。遺構外出土石器の内訳は、石鎌が16点、石錐が2点、石匙が5点、石砲が2点、磨石が14点、石皿が2点、その他搔器・削器が多く占める。

石鎌は、無茎・有茎ともほぼ同じ割合で出土しており、柳葉形は17の1点のみである。18は玉柄のアメリカ式石鎌で今回南側調査区で1点だけ出土した。

19・20は石錐でいずれもつまみ状の頭部は円形で錐部が欠損している。付着物はない。

石匙の21はA・Bとも同位置からの出土ではなく、若干離れて出土している。接合できるもののAの下端部には、新たな剥離面があり、B部分が欠損した後も刃部を入れて使用しようとした試みをみることができる。31は、両面とも精巧に丁寧に刃部が作られている。そして、スクリーントーンで示したように、片側にのみアスファルトルらしい付着物が残っており、着柄して使用したことがわかる。「く」の字に曲がる内側を着柄していないことから、使用方法を想像するに現在の草刈り鎌のように、手前に引いて使用することが刃部をいかすもっとも効果的な使用方法と考えられる。42・46はつまみ部分の存在が読みとれなくもなく、石匙の可能性もある。

48はちょうど手の中におさまる大きな削器である。

磨石を多く占める砾器の石質は安山岩（溶岩）が今回目立った。それに伴い同質の石皿も2点出土している。

69・70は石斧状に加工されたものであるが、特に69は石斧として使用するための刃部がみあたらず、実用の道具の可能性が薄い。

＜参考文献＞

1986 観音堂遺跡第1次～第6次発掘調査報告書 大迫町埋蔵文化財報告第11集 大迫町教育委員会

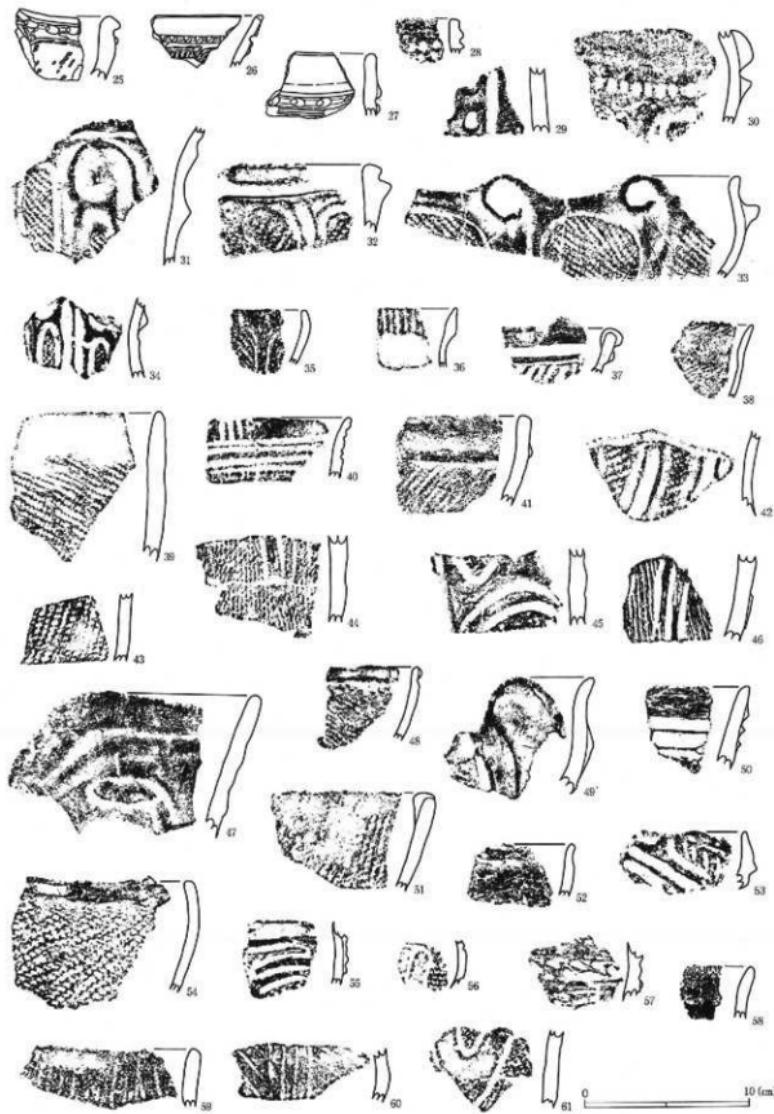
1984 「上ノ台A遺跡」真野ダム関連遺跡発掘調査報告V 福島県文化財調査報告書第128集

福島県文化センター

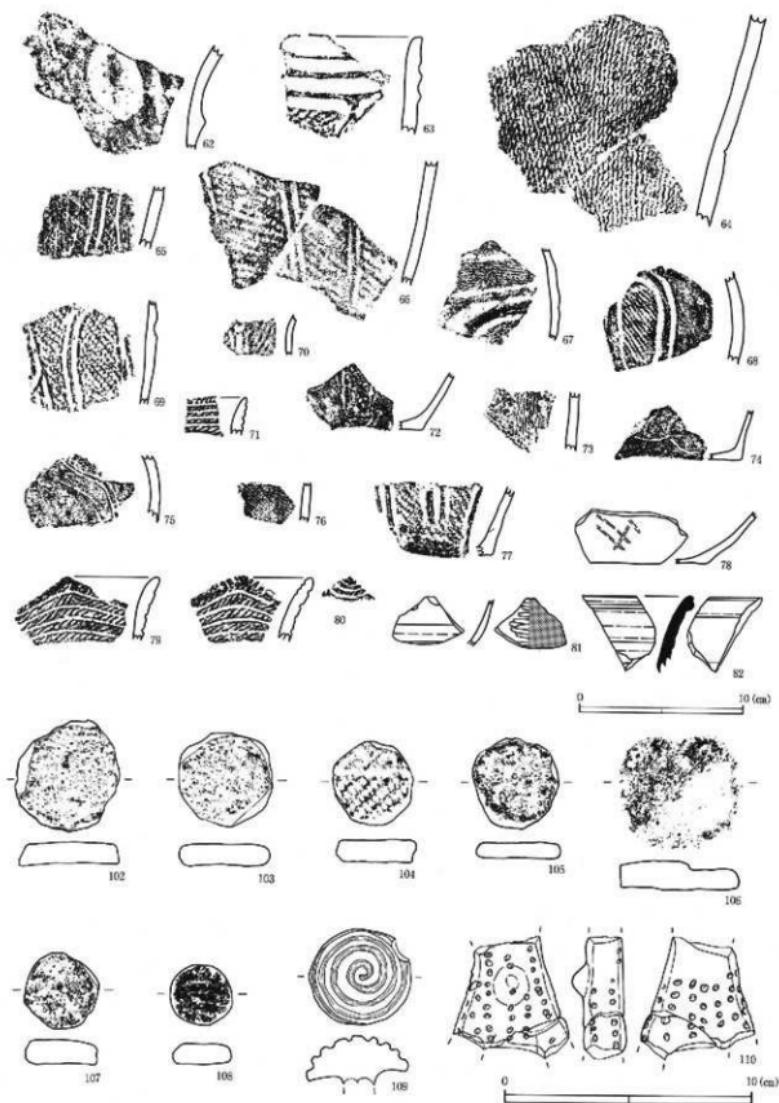
1989 丹羽 浩「中期大木式土器様式」 繩文土器大観1 小学館



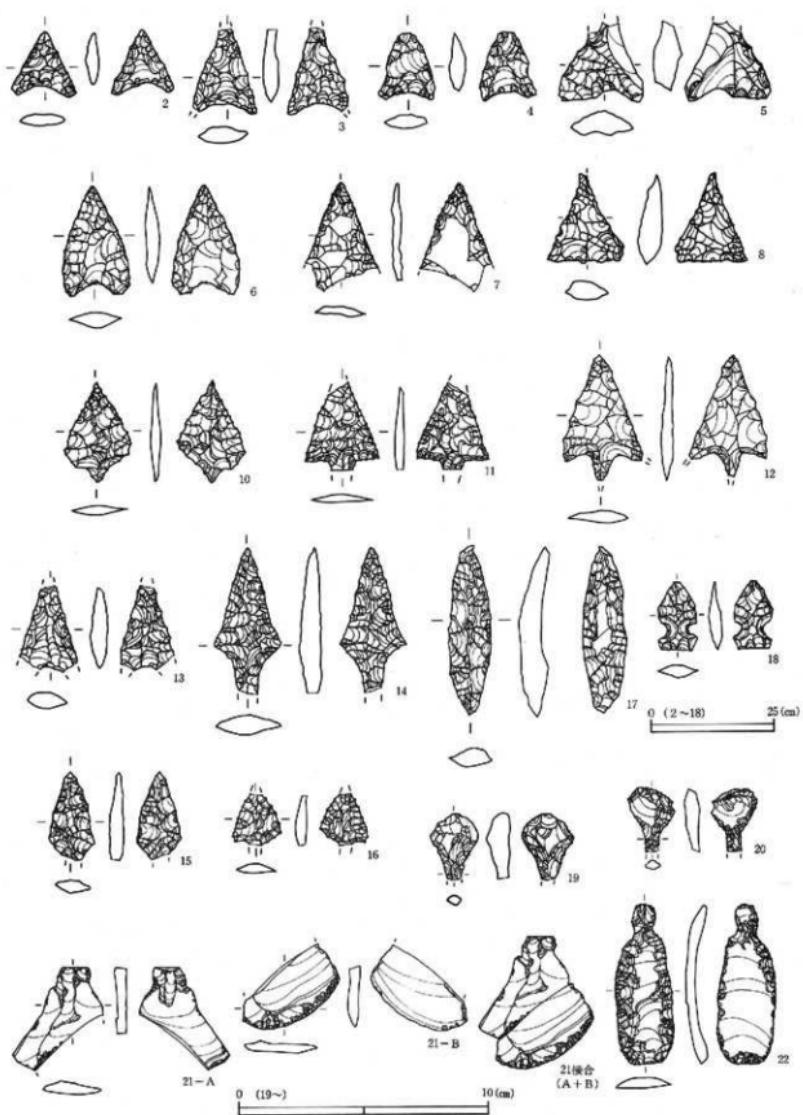
第14図 遺構外出土土器 (1)



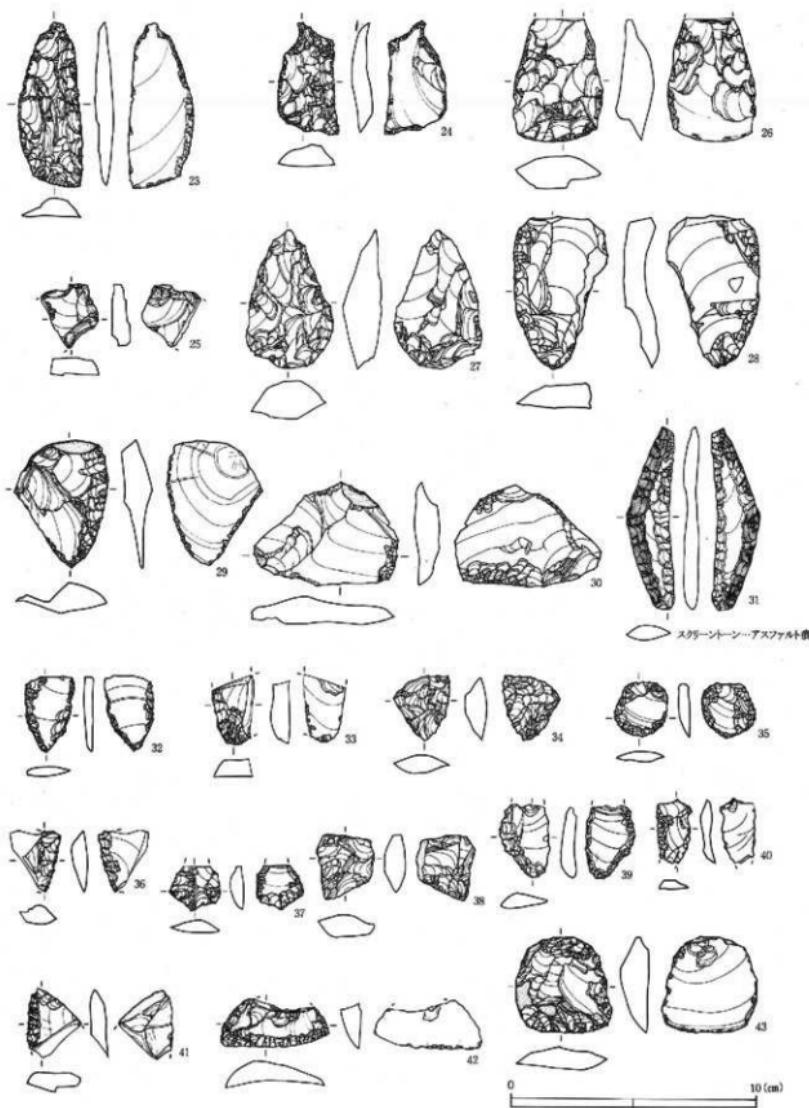
第15図 遺構外出土土器 (2)



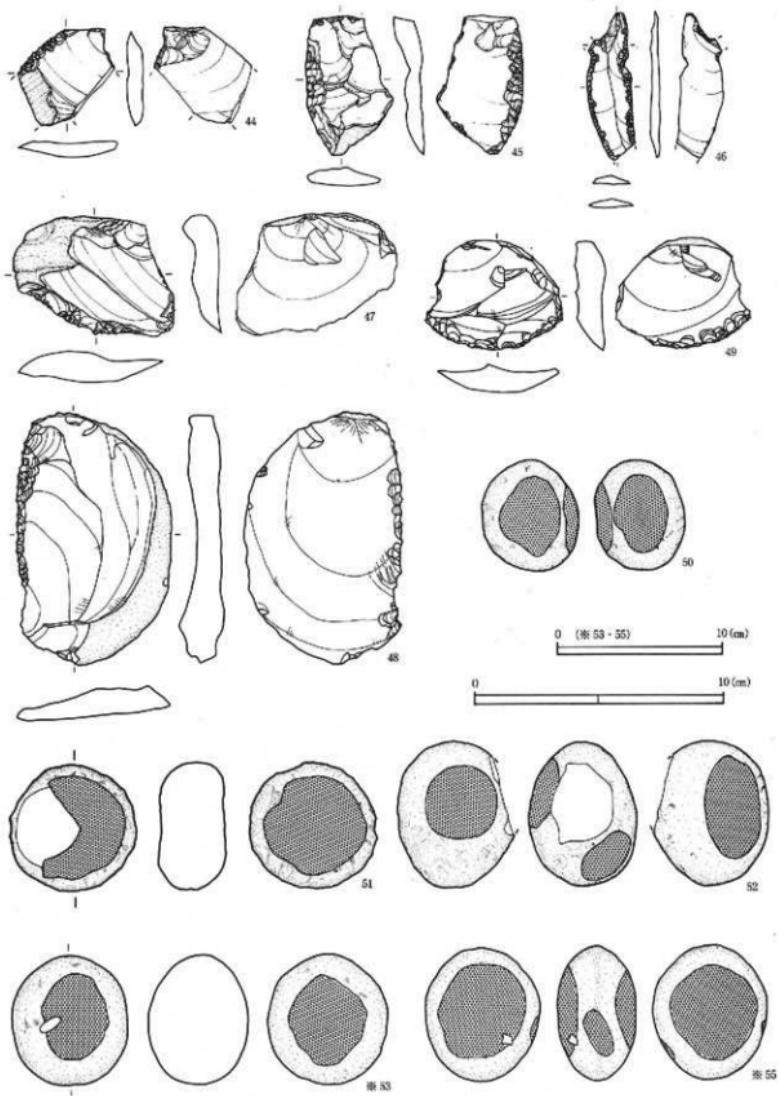
第16図 遺構外出土土器(3)・土製品



第17図 遺構外出土石器 (1)



第18図 遺構外出土石器 (2)



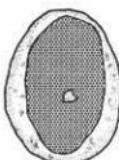
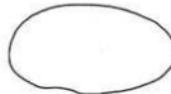
第19図 遺構外出土石器 (3)



54



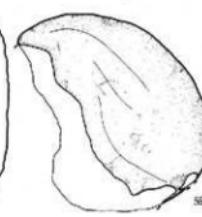
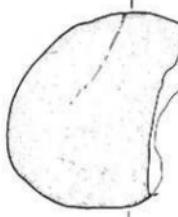
56



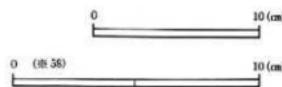
57



58



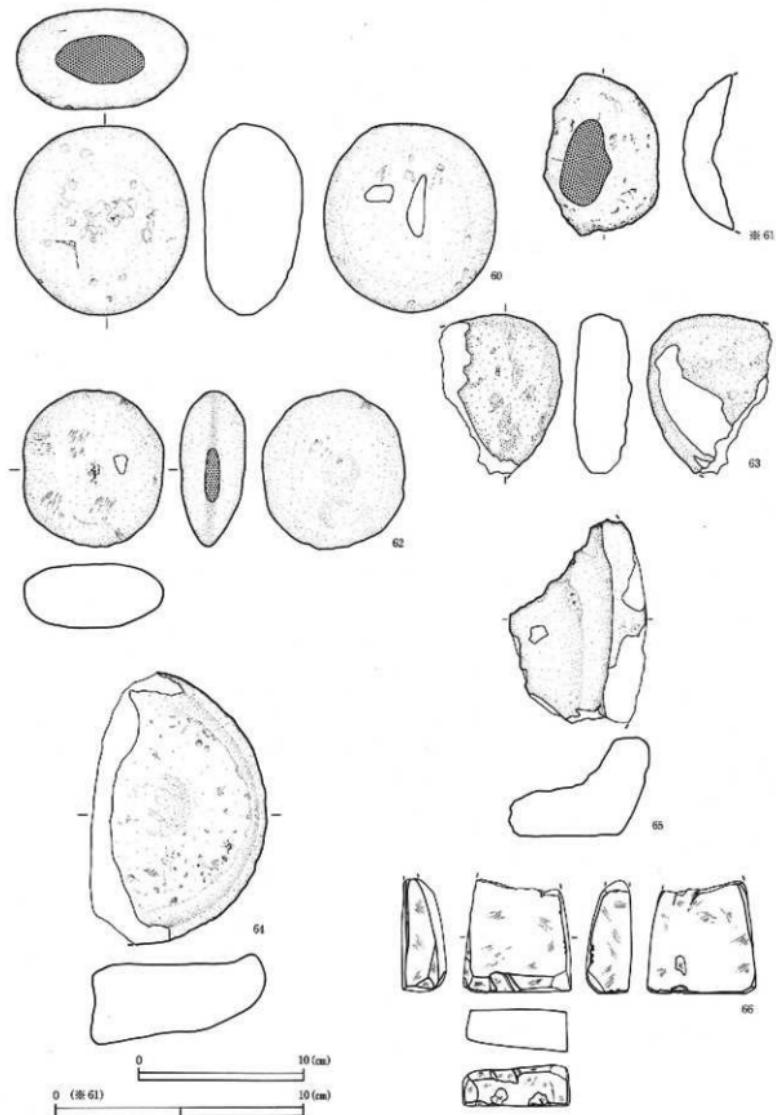
59



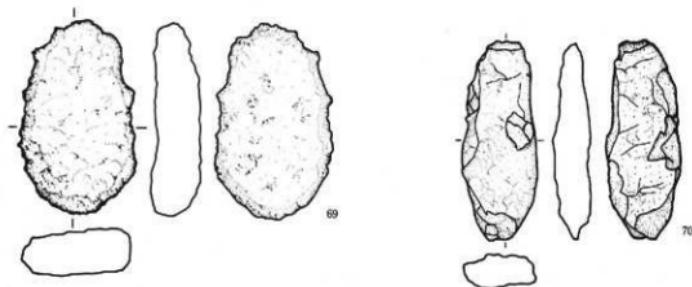
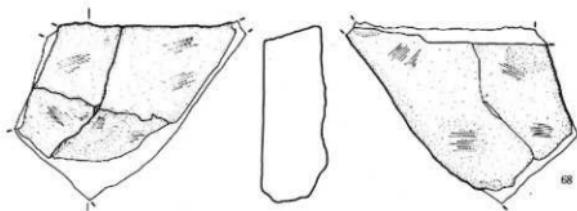
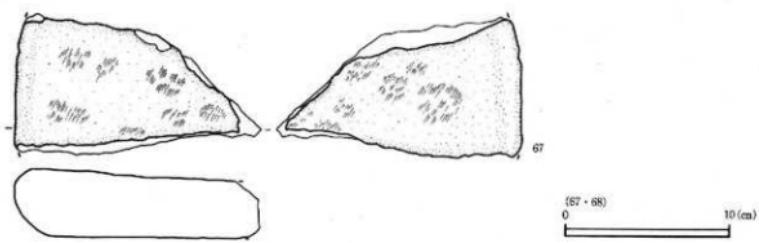
0 (至 56)

10 (cm)

第20図 遺構外出土石器 (4)



第21圖 齊精外出土石器 (5)



第22図 遺構外出土石器 (6)

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様・その他	内面	分類	図版	写真
1	堅穴状遺構 上位	深鉢	胴部	LR縞文 磨滅著しい	ナデ	III	8	6
2	6号土坑 上位	深鉢	胴部	条線	I	9	6	
3	8号土坑	蓋	口～底	LR縞文 口縁部沈線 輪積痕残る	ナデ	III	10	6
4	II C2 b・T8 II・Ⅲ層	深鉢	胴～底	網代痕	ナデ	I	14	6
5	II B2 g Ⅲ層	深鉢	平行	平行沈線 磨消縞文 LR縞文 刺突	ナデ	II	14	6
6	II B2 g Ⅲ層	深鉢	平行	平行沈線 磨消縞文 LR縞文 刺突	ナデ	II	14	6
7	II B2 i Ⅲ層	甕?	頸～肩	土師器	ケズリ	IV	14	6
8	I A10 j	深鉢	胴部	磨滅著しい LR?	ナデ		14	6
9	I A10 j	深鉢	口縁部	口唇部押圧 磨り消し LR縞文	ナデ	III	14	6
10	I A8 g・9 g Ⅲ層	蓋	口～底	土師器 ケズリ 輪積痕	ナデ	IV	14	6
11	I C区 I～II層	壺	底部	土師質	ロクロ	IV	14	6
12	I C9 e	壺	底部	土師質須恵器	ロクロ 回転糸切痕	IV	14	6
13	I C区 I～II層	壺	口～体	須恵器 口縁部多少外反 丸縫	IV	14	6	
14	I E7 c Ⅲ層	深鉢	胴部	貼付隆帯 沈線 LR縞文	ナデ	I b 1	14	6
15	I E8 a Ⅲ層下位	深鉢	胴部	貼付隆帯 沈線 RLR	ナデ	I b 2	14	6
16	I D7 g Ⅲ層	鉢	口～胴	波状口縁 沈線 LR	ナデ	I a	14	6
17	I E9 c Ⅲ層	小笠鉢	口縁部	波状口縁 沈線 RLR	ナデ	I a	14	6
18	I E10 a Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状口縁 隆帯 沈線	I b 2	14	6	
19	I D区 II層	深鉢	胴部	RL		I b 2	14	6
20	I E区 II層	深鉢	口縁部	突起部		I b 2	14	6
21	I E9 a・10 a Ⅲ層	深鉢	胴部	RLR 沈線	ナデ	I b 1	14	6
22	I E6 a Ⅲ層上面	深鉢	口～胴	RLR 貼付隆帯 炭化物付着	ミガキ	I b 2	14	6
23	I E7 a・8 a Ⅲ層下位	深鉢	胴部	隆帯 沈線		I b 1	14	7
24	I E10 b Ⅲ層	深鉢	口縁部	貼付隆帯	ナデ	I b 2	14	7
25	I D区 Ⅲ層上面	深鉢	口縁部	RLR 刺突 波状口縁	ナデ	I	15	7
26	I D区 II層	深鉢	口縁部	RLR 刺突 隆帯 沈線	ナデ	I b 2	15	7
27	I E8 a	深鉢	口縁部	隆帯 沈線 刺突		I	15	7
28	I E8 a Ⅲ層下位	深鉢	口縁部	刺突	ナデ		15	7
29	I E区 II層	深鉢	胴部	刺突	ナデ	I	15	7
30	I E8 a Ⅲ層下位	深鉢	胴部	刺突 隆帯		I	15	7
31	I E1 b Ⅲ層	深鉢	胴部	LR 逆U字形	ナデ	I c	15	7
32	I E7 a・8 a Ⅲ層下位	深鉢	口縁部	LR	ナデ	I	15	7
33	調査区外	深鉢	口縁部	波状口縁		I c	15	7
34	I E6 a Ⅲ層下位	深鉢	胴部	隆帯 沈線 RLR	ナデ	I c	15	7
35	I E区 II層	深鉢	口縁部	逆U字形		I c	15	7
36	I E区 II層	深鉢	口縁部	刻み目	ナデ		15	7
37	I D区 II層	深鉢	口縁部	押圧	ナデ	I	15	7
38	I D6 i 放乱層	深鉢	口縁部	炭化物付着	ナデ		15	7
39	I E区 Ⅲ層	深鉢	口縁部	LR縞文			15	7
40	II D1 j Ⅲ層	深鉢	口縁部	平行沈線	ナデ		15	7
41	I D区 II層	深鉢	口縁部	折返し口縁	ナデ		15	7
42	I E区 II層	深鉢	胴部	RLR 隆帯 沈線	ナデ	I c	15	7
43	I D区 II層	深鉢	胴部	RLR		I	15	7
44	I E区 II層	深鉢	胴部			I	15	7
45	I E区 II層	深鉢	胴部			I	15	7
46	I D9 i Ⅲ層	深鉢	胴部	炭化物付着 捻糸文 貼付隆帯	ナデ	I c	15	7
47	I E9 a Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状口縁 沈線		I	15	7
48	I E10 c Ⅲ層	深鉢	口縁部	折返口縁	ナデ		15	7
49	I E6 a・5 a Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状口縁 隆帯	ナデ	I c	15	7
50	I E9 a Ⅲ層	深鉢	口縁部	沈線	ナデ		15	7
51	I E区 表採	深鉢	口縁部	RL	ナデ		15	7
52	I E6 a・7 a Ⅲ層	深鉢	口縁部	縞位の条線	ナデ		15	7
53	I E6 c Ⅲ層	深鉢	胴部	刻み目 隆帯 沈線			15	7
54	I E7 c Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ナデ		15	7
55	I E8 a Ⅲ層	深鉢	口縁部	R LR 炭化物付着有り		I	15	7
56	I E区	深鉢	胴部	RLR			15	7

第3表 土器観察表 (1)

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様・その他	内面	分類	図版	写真	
57	I E K 排土	深鉢	胸部	刺突 沈線		I	15	7	
58	I E 6 c III層	深鉢	口縁部	燃条文		ナデ	15	7	
59	I E 7 a・8 a III層下位	深鉢	口縁部	波状口縁 沈線		ナデ	15	7	
60	I E 8 c III層下位	深鉢	胸部				16	8	
61	I E 区 表採	深鉢	胸部	磨消繩文 L R			15	8	
62	I E 9 a・10 b III層	深鉢	胸部	隆帯 沈線		I	16	8	
63	I E 9 b III層下位	深鉢	口縁部	平行沈線 隆帯 炭化物付着有り		ナデ	16	8	
64	I E 8 a	深鉢	胸部	燃条文 炭化物付着		ナデ	16	8	
65	I E 7 b・8 b III層	深鉢	胸部	燃条文 網目状			16	8	
66	I E 9 c III層	深鉢	胸部	沈線 逆U字形		ナデ	I c	16	8
67	I E 8 a III層	深鉢	胸部	R L R 炭化物付着有り		ナデ	I	16	8
68	I E 7 c III層	深鉢	口縁部	L R 逆U字形		ナデ	I c	16	8
69	I E 7 a・8 a・8 b III層下位	深鉢	口縁部	R L R 沈線		ナデ	I c	16	8
70	I E 9 a III層	小型深鉢	胸部			ナデ		16	8
71	I D 7 i・8 i	深鉢	口縁部	L R 4条の沈線		ナデ		16	8
72	I E 7 c III層	深鉢	底部	網代痕 L R ?		ナデ	I c	16	8
73	I E 区 III層下位	深鉢	胸部			ナデ		16	8
74	I E 9 b III層	深鉢	底部	小葉痕			I	16	8
75	I E 7 c III層	深鉢	胸部	沈線			I c	16	8
76	I E 区 I 層下位	深鉢	胸部			ナデ		15	8
77	I E 5 c・6 c III層下位	深鉢	底部	貼付隆帯 輪積み底有り 炭化物付着有り			I c	16	8
78	I E 8 c III層下位	深鉢	底部	格子文 一筋赤色付着		ナデ		16	8
79	I D 7 III層	深鉢	突起部	5条以上の平行沈線		ナデ	II	16	8
80	I DK II層	深鉢	突起部	4条の平行沈線 内面にも平行沈線有り		ナデ	II	16	8
81	I DK II層	壺	体部	内黒土器		ミガキ	IV	16	8
82	II B 1 f III層下	壺	口縁部	須恵器壺 内面に自然軸			IV	16	8

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様・その他	内面	分類	図版	写真
101	竪穴状遺構 中位	耳栓	中央部へこみ				8	8
102	II B 1 j III層	円盤形					16	8
103	I E 区 II層	円盤形					16	8
104	I E 6 b III層下位	円盤形					16	8
105	I E 6 c III層	円盤形					16	8
106	I E 9 a III層	円盤形					16	8
107	I E 7 a III層下位	円盤形					16	8
108	I E 6 c III層	円盤形					16	8
109	I E 6 b III層下位	*ノコ形					16	8
110	I E 5 a III層	土偶	胸部			I	16	8

第3表 土器観察表 (2)

番号	出土地点・層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産出地	図版	写真	写真番号
1	3号焼土	石鏃	1.9	1.3	0.25	0.4	頁岩	北上山地	11	9	2
2	I E 6 b III層下	石鏃	1.2	1.3	0.2	0.3	凝灰岩	北上山地	17	9	6
3	I E III層	石鏃	1.8	1.3	0.3	0.3	凝灰岩	北上山地	17	9	5
4	I E 7 a III層下	石鏃	1.4	1.1	0.3	0.3	凝灰岩	北上山地	17	9	4
5	I E 4 c III層下	石鏃	1.6	1.7	0.6	1.0	頁岩	北上山地	17	9	8
6	I E 6 a III層下	石鏃	2.3	1.3	0.3	0.9	頁岩	北上山地	17	9	3
7	I B 10 j III層	石鏃	2.2	1.5	0.2	0.5	頁岩	北上山地	17	9	9
8	I E 7 b III層	石鏃	1.8	1.5	0.4	1.0	頁岩	北上山地	17	9	7
9	竪穴状遺構	石鏃	2.9	1.5	0.3	1.3	赤色頁岩	北上山地	8	9	1
10	I B 9 j III層	石鏃	2.1	1.3	0.2	0.5	頁岩	北上山地	17	9	14
11	II B 1 j III層	石鏃	* 1.8	1.5	2.0	0.5	頁岩	北上山地	17	9	16
12	I B 10 j III層	石鏃	2.5	1.6	0.25	0.8	頁岩	北上山地	17	9	11
13	I E 6 b III層下	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.6	頁岩	北上山地	17	9	10

第4表 石器観察表 (1)

* 欠損部 有

番号	出土地点・層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産出地	国版	写真	図号
14	I A 9 h III層下	石鏃	3.0	1.3	0.4	1.1	珪質頁岩	北上山地	17	9	13
15	I E 5 c - 6 c III層下	石鏃	1.8	0.9	0.3	0.4	頁岩	北上山地	17	9	12
16	I E 区	石鏃	* 1.1	1.0	0.2	0.1	頁岩	北上山地	17	9	15
17	I E 区 表深	石鏃	3.5	0.9	0.6	1.8	頁岩	北上山地	17	9	18
18	I E 9 c III層下	石鏃	1.45	0.8	0.25	0.2	玉髓		17	9	17
19	I E 8 a III層	石鏃	* 2.75	2.05	0.45	4.1	頁岩	北上山地	17	9	19
20	I E 6 b III層	石鏃	* 2.6	1.9	0.6	2.4	頁岩	北上山地	17	9	20
21	I B 10 j III層	石匙	5.4	4.6	0.6	11.4	頁岩	北上山地	17	9	22
22	I E 区 III層上	石匙	6.5	2.3	0.8	9.7	頁岩	北上山地	17	9	24
23	I E 9 c - 10 d III	石匙	6.8	2.6	0.8	13.6	頁岩	北上山地	18	9	25
24	I D 区 III層上	石匙	4.1	2.5	0.9	10.2	頁岩	北上山地	18	9	23
25	I E 4 c III層下	石匙	2.6	2.3	0.7	5.2	頁岩	北上山地	18	9	28
26	I E 6 a - 7 a III	石匙	5.0	3.6	1.5	27.2	頁岩	北上山地	18	9	26
27	I E 区	石鏃	5.7	3.5	1.6	27.6	頁岩	北上山地	18	9	27
28	I D 区 II層	搔器	3.7	6.3	0.95	29.0	頁岩	北上山地	18	9	35
29	I E 9 c III層下	搔器	5.2	3.8	1.2	18.3	頁岩	北上山地	18	9	37
30	I E 9 a ~ 10 b III	搔器	4.2	5.8	1.1	26.6	頁岩	北上山地	18	9	36
31	I A 10 j III層	搔器	7.5	2.0	0.7	8.8	頁岩	北上山地	18	9	21
32	II D 9 i - 10 j III層	搔器	3.0	2.0	0.4	2.8	頁岩	北上山地	18	9	55
33	II B 1 j III層	石鏃	2.8	1.7	0.8	4.9	頁岩	北上山地	18	9	30
34	I D 区 II層	石鏃	2.6	2.3	0.8	4.7	頁岩	北上山地	18	9	33
35	I D 10 j II層	搔器	2.15	2.15	0.5	2.7	頁岩	北上山地	18	9	42
36	I E 10 c III層下	石鏃	2.5	2.05	0.8	3.0	頁岩	北上山地	18	9	43
37	II B 1 i III層	石鏃	1.8	2.0	0.6	1.8	玉髓		18	9	59
38	I E 10 a III層	石鏃	2.6	2.4	0.9	5.4	頁岩	北上山地	18	9	46
39	I E 9 a ~ 10 b III	石鏃	3.0	2.0	0.6	4.2	頁岩	北上山地	18	9	58
40	I E 区 搖乱	石鏃	2.7	1.3	0.4	1.6	頁岩	北上山地	18	9	61
41	I E 9 c III層下	石鏃	2.85	2.2	0.8	3.9	頁岩	北上山地	18	9	47
42	I D 区 III層上	石鏃	2.0	4.4	1.1	8.0	頁岩	北上山地	18	9	32
43	I E 区 III層	搔器	3.9	3.9	1.1	16.8	頁岩	北上山地	18	10	38
44	I D 9 h - 9 i III層	石鏃	4.0	4.0	0.6	10.4	頁岩	北上山地	18	10	40
45	I E 6 a - 6 b III層	石鏃	5.7	3.5	1.2	15.7	頁岩	北上山地	19	10	34
46	I E 6 c III層	石鏃	5.9	1.9	0.4	4.5	頁岩	北上山地	19	10	29
47	I E 区 II層	石鏃	5.0	6.5	1.3	42.4	頁岩	北上山地	19	10	41
48	I E 8 b III層	搔器	10.2	6.2	1.7	98.2	頁岩	北上山地	19	10	60
49	I E 9 a ~ 10 b III	搔器	4.4	5.5	1.0	32.3	頁岩	北上山地	19	10	39
50	I E 7 a - 8 a III下	磨石	4.6	3.9	3.5	77.2	安山岩	奥羽山脈	19	10	64
51	I E 8 b III層	磨石	5.15	5.1	2.55	55.7	安山岩 (溶岩)	奥羽山脈	19	10	62
52	I E 7 c III層	磨石	6.0	* 4.6	4.4	117.7	安山岩 (溶岩)	奥羽山脈	19	10	72
53	I E 7 c III層	磨石	7.9	7.0	6.0	400.0	安山岩	奥羽山脈	19	10	69
54	I E 8 a III層	磨石	11.3	7.3	4.7	610.0	安山岩	奥羽山脈	20	10	67
55	I D 7 h III層	磨石	8.1	7.0	4.8	380.0	安山岩	奥羽山脈	19	10	70
56	I D 9 c III層	磨石	12.9	10.2	5.4	1000.0	安山岩	奥羽山脈	20	10	65
57	I E 7 a III層下	磨石	9.4	7.05	4.45	460.0	安山岩	奥羽山脈	20	10	71
58	I E 7 a - 8 a III下	磨石	6.4	5.9	4.5	180.0	安山岩	奥羽山脈	20	11	63
59	I E 8 d III層	磨石			3.5	410.0	安山岩 (溶岩)	奥羽山脈	20	11	3
60	I E 10 c	磨石	11.5	10.5	6.1	1110.0	安山岩	奥羽山脈	21	11	75
61	I E 8 d III層	磨石	* 5.6	* 4.7	* 1.5	53.5	安山岩	奥羽山脈	21	11	68
62	I E 8 c III層	磨石	9.5	8.5	3.9	440.0	安山岩	奥羽山脈	21	11	66
63	I E 8 d III層	磨石	9.6	7.2	3.4	190.0	安山岩 (溶岩)	奥羽山脈	21	11	74
64	I D 9 i III層	石皿	16.7	11.1	4.6	690.0	安山岩 (溶岩)	奥羽山脈	21	11	78
65	II D 1 j III層	石皿			3.8	350.0	安山岩 (溶岩)	奥羽山脈	21	11	76
66	I E 9 d III層	砾石			2.8	200.0	砂岩	奥羽山脈	21	11	82
67	I E 7 b - 8 b III層		8.6	15.1	4.1	800.0	安山岩	奥羽山脈	22	12	77
68	I A 8 f				4.0	740.0	安山岩	奥羽山脈	22	12	80
69	I E 9 c III層下		8.0	4.8	2.2	120.0	角閃玢岩	北上山地	22	12	79
70	I E 8 d III層		8.1	3.0	1.3	45.7	角閃玢岩	北上山地	22	12	81

第4表 石器觀察表(2)

* 欠損部 有

V ま と め

今回の調査では、大半の遺物が遺構に伴わず客土の中から出土しており、残念な結果となった。幸い北側調査区では、は堀整備等の手が加わらなかったため当時の地形が残り、多くはないが遺構の存在を確認することができた。

遺構配置図でも分かるように、調査区の北側の方に堅穴状遺構をはじめ、土坑等の遺構が集中している。中央部分については遺構は検出されず、一部畝間状遺構のみを検出できただけである。こうした状況を遺物の出土状況と照らし合わせてみると、遺構の検出された北側調査区では縄文時代後期・晚期の土器を含み、中央部分は土師器・須恵器が出土している。そして、南側に向かって遺物の出土しない畝間状遺構・火山灰堆積地、そして縄文時代中期後半の土器を多く含んだ客土(盛り土)部分となる。隣接する伊手川は、現在も雨天が続くと洪水しやすい川であり、昔から幾度となく川砂や土砂が覆い尽くしたと思われる。遺構が検出された部分は周辺よりも若干高く、河川の影響が割合と少ないため遺構が残った可能性が高い。中央部分から火山灰が堆積している地域まではグライ化しており、沢辺に湿地になっている。当時から、最も低地の部分に火山灰が降り積もり、水性作用により火山灰の2次堆積もされたのであろう。

南側調査区の縄文時代中期後半の土器の出土により周辺に同時期の遺構が存在することを否定できない。醍醐寺跡伝承地で見られた同時期の遺物の出土からもわかるように、この調査区の周辺は水田の広がっている盆地で、水田地帯を囲うように丘陵地が巡る。この一角に醍醐寺跡伝承地がある。この地域は、稲作地として昔から一等地とされるほど、日照条件をはじめとする様々なことについて好条件がそろっている。そのため、この地域では古くから稲作のみならず、集落が広がっていたと思われる。今回の調査区内の遺構の分布等をみると、縄文時代後期・晚期の時代の集落跡、平安時代の集落跡は調査区周辺などに、また少し離れて丘陵地の麓には縄文時代中期の人々が生活を営んでいた可能性が考えられる。

写真図版





調査区遠景（南側より）



調査区近景（北側より）

写真図版 1 調査区遠景・近景



北侧调查区基本层序



南侧调查区基本层序



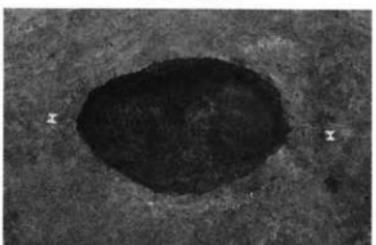
竖穴状遗构完掘



竖穴状遗构南北断面



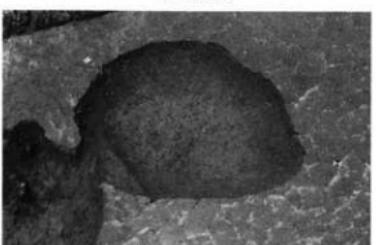
竖穴状遗构东西断面



1号土坑完掘



1号土坑断面

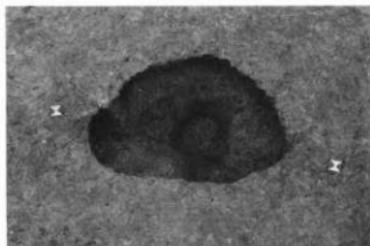


2号土坑完掘



2号土坑断面

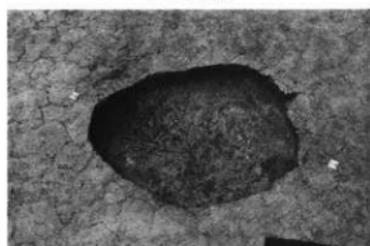
写真图版2 基本层序·竖穴状遗构·1号土坑·2号土坑



3号土坑完掘



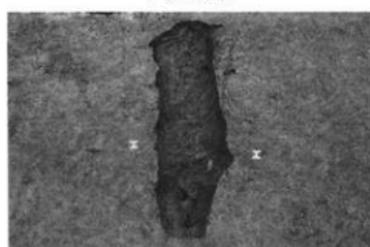
3号土坑断面



4号土坑完掘



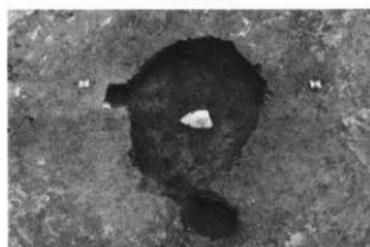
4号土坑断面



5号土坑完掘



5号土坑断面



6号土坑完掘

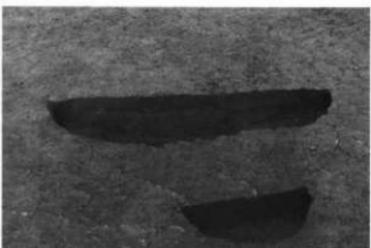


6号土坑断面

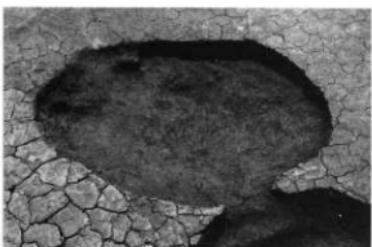
写真図版3 3号土坑～6号土坑



7号土坑完掘



7号土坑断面



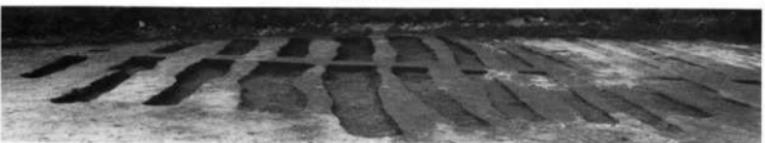
8号土坑完掘



8号土坑断面

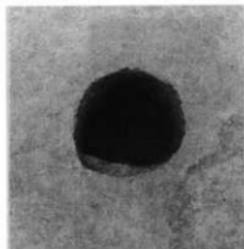


鉄間状造構完掘

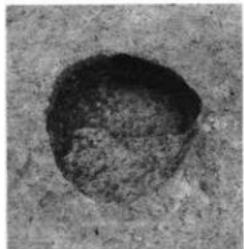


鉄間状造構断面

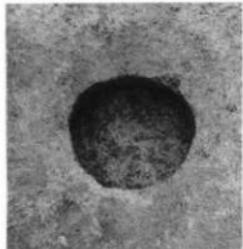
写真図版4 7号土坑・8号土坑・鉄間状造構



PP 1 完掘



PP 4 完掘



PP 6 完掘



1号焼土検出状況



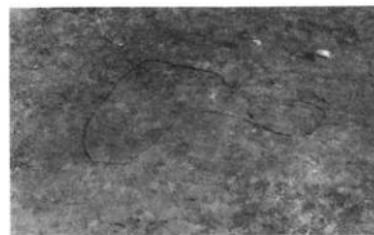
2号焼土検出状況



1号焼土断面



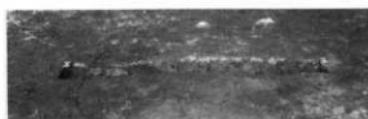
2号焼土断面



3号焼土検出状況

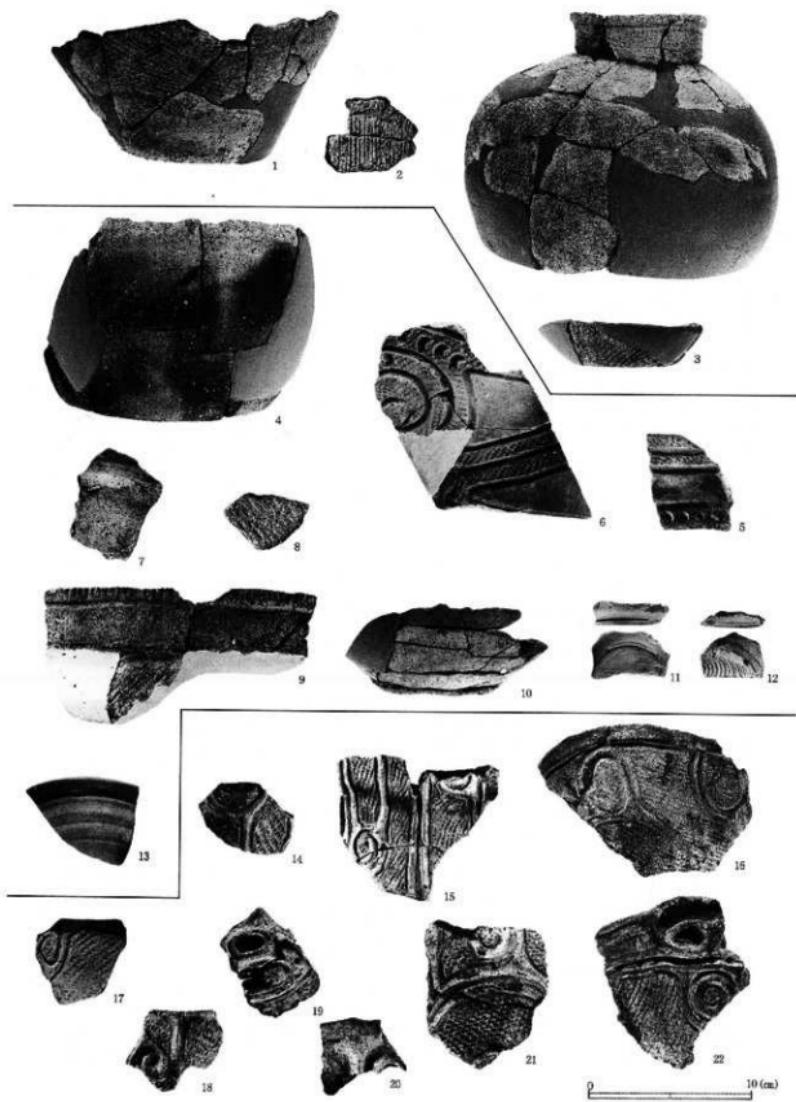


火山灰検出状況

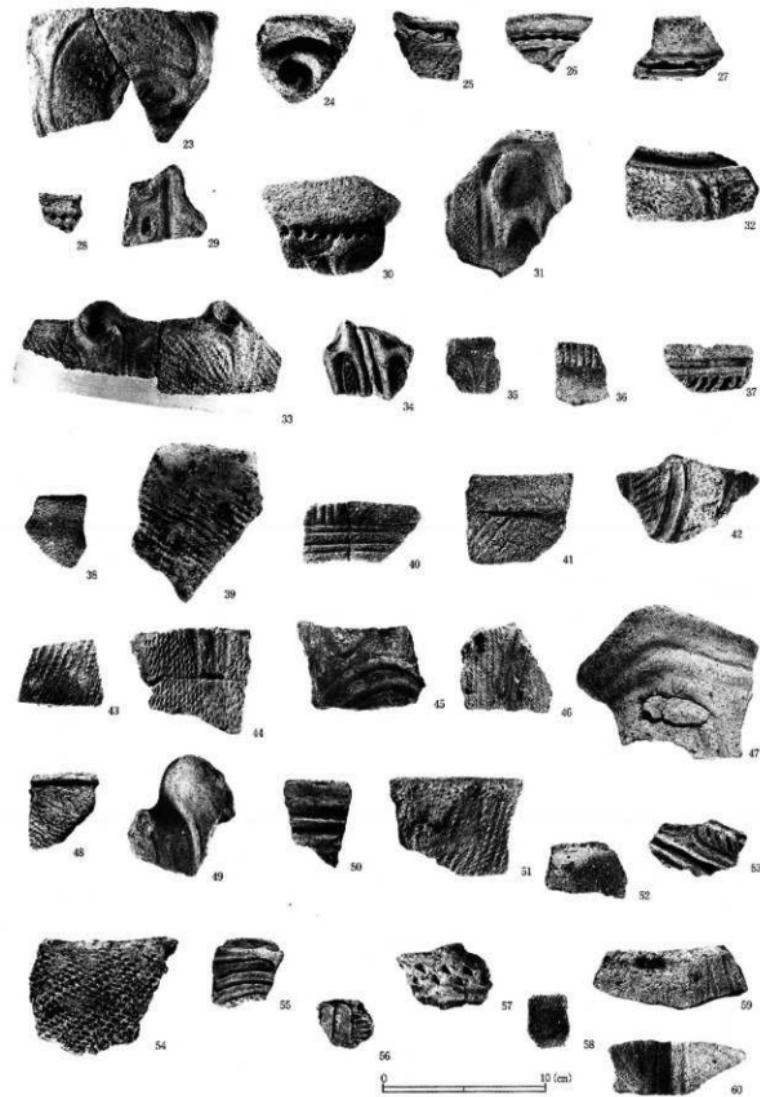


3号焼土断面

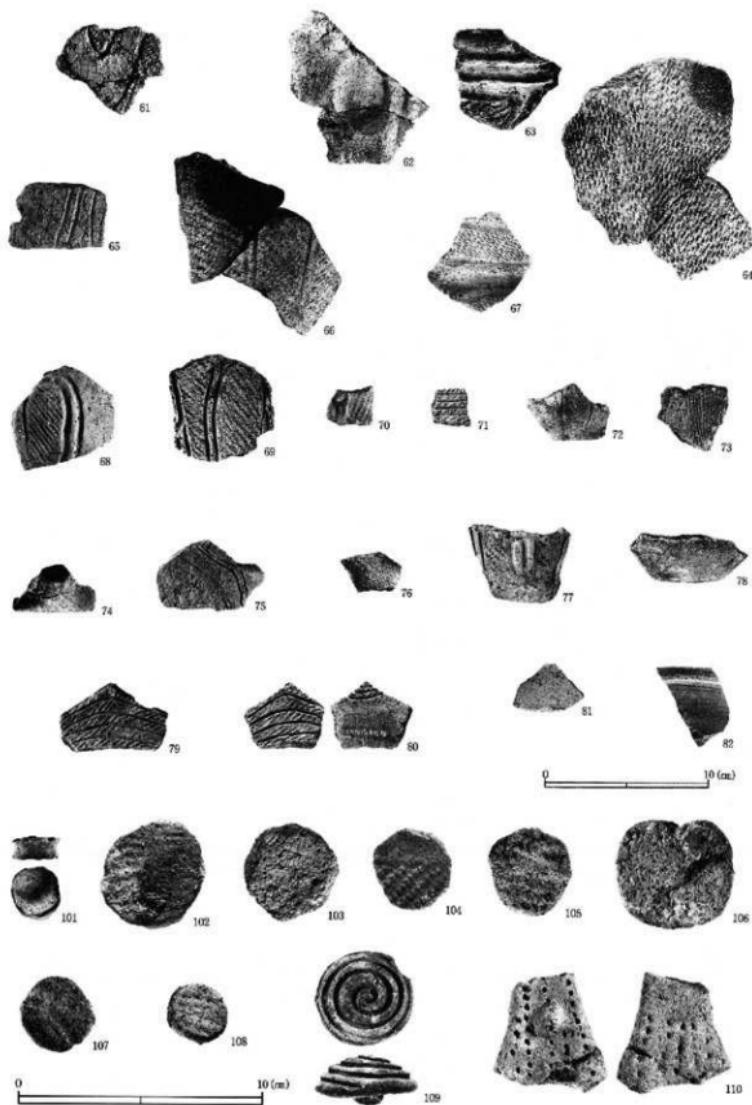
写真図版5 柱穴状ピット・焼土・火山灰検出状況



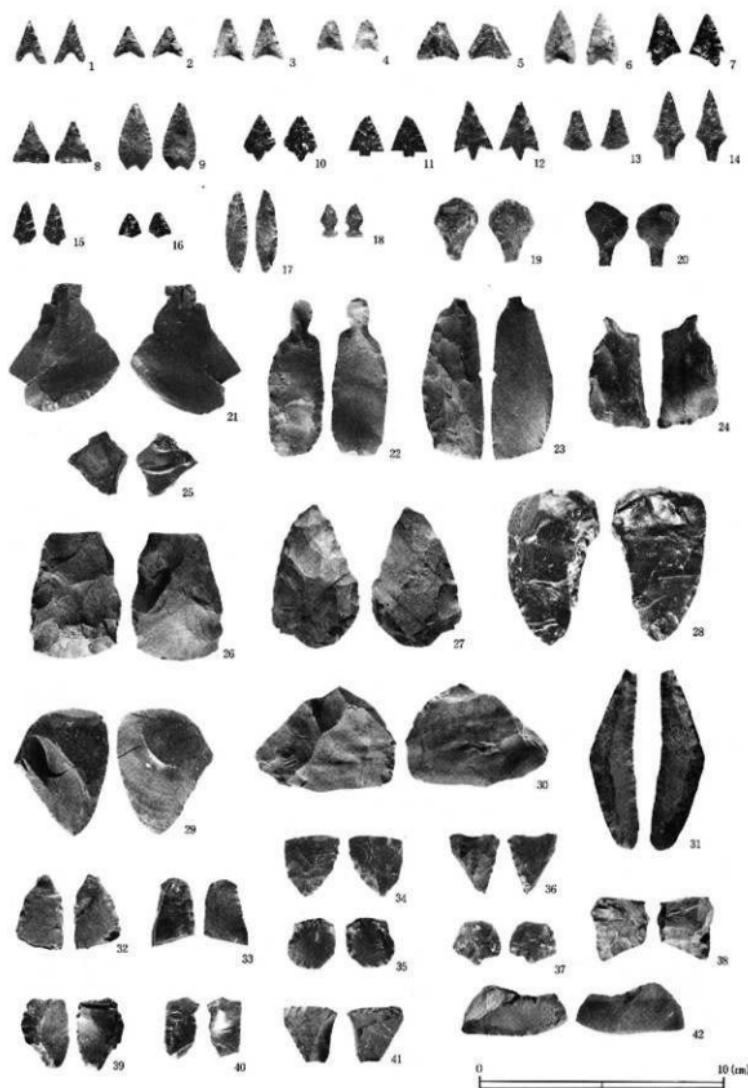
写真図版 6 出土土器 (1)



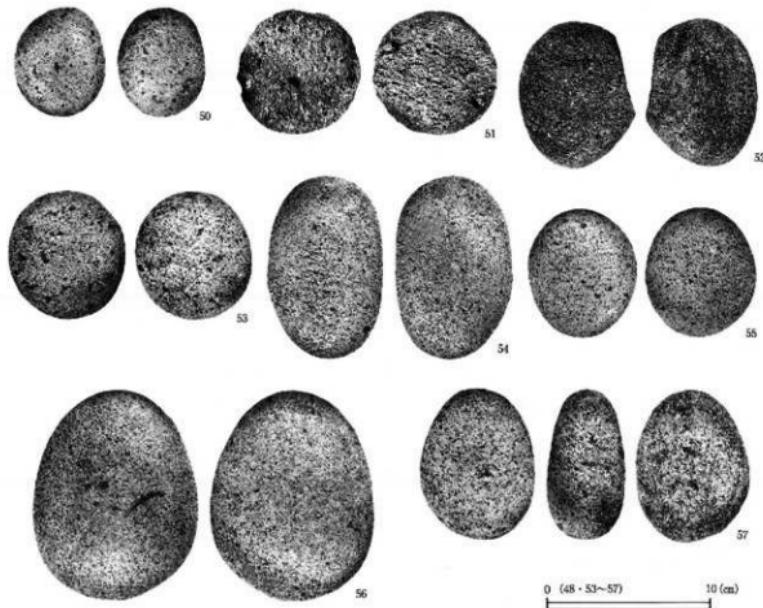
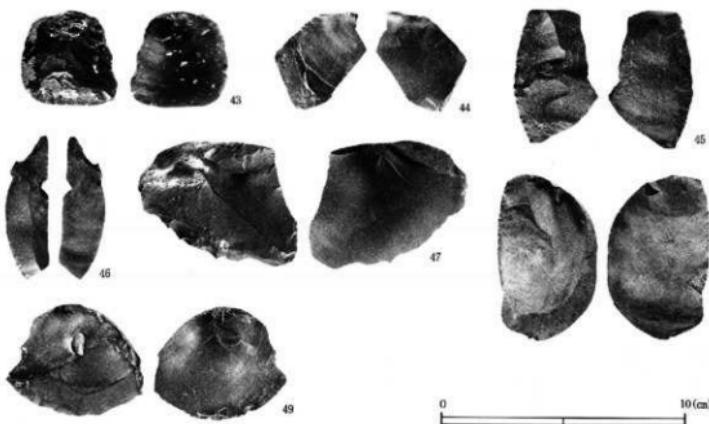
写真図版 7 出土土器 (2)



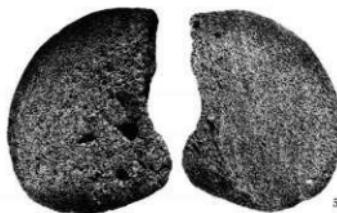
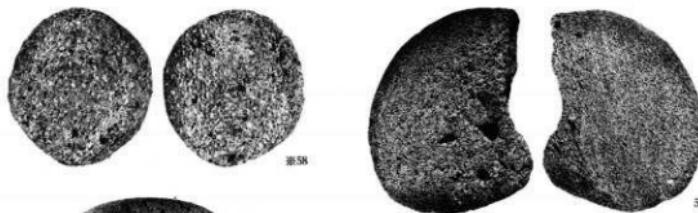
写真図版8 出土土器(3)・土製品



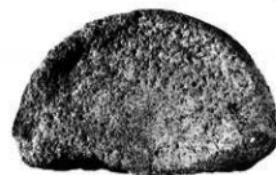
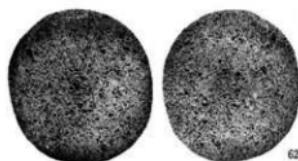
写真図版9 出土石器 (1)



写真図版10 出土石器 (2)



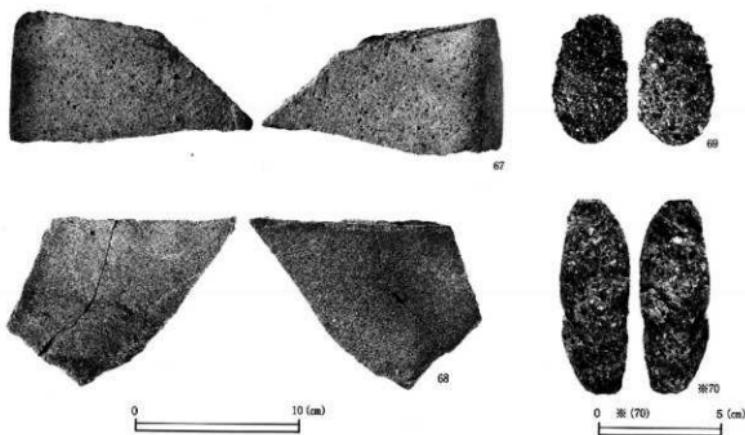
0 至 (58・61) 5 (cm)



0 10 (cm)



写真図版11 出土石器 (3)



写真図版12 出土石器 (4)

報告書抄録

ふりがな 所取遺跡名	しもだいごいせきはっくつちょうさほうこくしょ 下醍醐遺跡			
書名	下醍醐遺跡発掘調査報告書			
副書名	一級河川伊手川小規模河川改修工事・原体地区扱い手育成基盤整備事業関連発掘調査			
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	第325集			
編著者名	木戸口俊子			
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター			
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001			
発行年月日	西暦1999年12月24日			
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ード 市町村 遺跡番号	北 緯	東 経
下醍醐遺跡	いわてごん えときし たけら あが こうのまこと 岩手県江刺市田原字高野前95ほか	03212 NE 08-2047	39°10'10"	141°12'37"
調査期間	調査面積	調査原因		
平成10年4月13日～6月30日	4,600m ²	一級河川伊手川小規模河川改修工事・原体地区扱い手育成基盤整備事業に伴う緊急発掘調査		
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文時代 平安時代	窓穴状遺構 土坑・焼土 柱穴状ピット 畝間状遺構	縄文土器・土製品 石器 土師器・須恵器	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 佐藤 基
副所長 伊藤 直司

〔管理課〕

課長主事立川日影花浪睦志夫

〔調查第一課〕

嘱託藤島恵子ヨリ重
ノリ
新田ト光重
佐々木

〔調査第二課〕

長	佐	門衛	紀介身澄幸一徵
課	財貿員	穂子計悟務光之琢	郎昭彦聰香彥規惠和勲徵
課	化藝查	佐知右衛門	郎昭彦聰香彥規惠和勲徵
主專文專	調査	義重義貞眞芳眞	雅雅昭浩忠昭里義俊佳里
主專文專	調査	橋川橋館部尾原藤田子測坂木山	木沢村子木澤谷口谷田川
主專文專	調査	高中高古阿松小工前金岩早佐晴星佐杉溜北金鈴平布山熊吉北吉	木沢村子木澤谷口谷田川
期專	付員	限門職	限門職

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第325集

下醍醐遺跡発掘調査報告書

一級河川伊手川小規模河川改修工事・原体地区掘い手育成基盤整備事業関連発掘調査

印刷 平成11年12月17日

発行 平成11年12月24日

発 行 鰐岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 内 海 印 刷

営業所 〒020-0875 岩手県盛岡市清水町8-8-108

TEL (019) 622-0288

本 社 〒026-0041 岩手県釜石市上中島町4-2-4

TEL (0193) 23-5511

